海面175mの塔頂より瀬戸大橋を臨む
（本州四国連絡高速道路㈱提供）

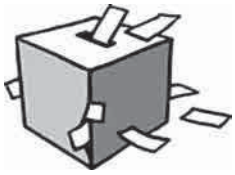
讃樹會

平成25年９月１日発行

CONTENTS

02　会長選挙・理事選挙告示
03　同窓生教授就任挨拶
04　教授退官挨拶
06　新任教授就任挨拶
08　ニュースの窓
11　平成25年度第一回国外留学助成金選考結果
11　理事会議事録
12　平成24年度会計報告及び平成25年度予算
14　平成25年度研究助成金／研究奨励金選考結果
16　近況報告
20　特集「女性医師特集」
26　国外留学助成金留学レポート
29　学生の短期留学報告
32　「10年後の私」の10年後
38　懇親会／ウィンドサーフィン部創部30周年
42　追悼
48　Album／卒業（28期生）
53　編集後記／事務局からのお知らせ
54　診療科だより

発行　香川大学医学部医学科同窓会讃樹會
〒761-0793　香川県木田郡三木町池戸1750-1
Tel/Fax　087-840-2291
E-mail　dousou@med.kagawa-u.ac.jp
http://www.kms.ac.jp/~dousou/
発行人　髙橋　則尋
編集人　中村　丈洋
印刷所　㈱美巧社



平成26年・平成27年同窓会長及び理事

選挙告示

選挙管理委員会　委員長　松本　義人

同窓会長選挙

平成26年３月の任期満了に伴い同窓会会長の選挙告示を行います。
同窓会選挙規定第５条をご確認の上立候補される会員の方は平成25年12月20日までに事務局までご連絡下さい。
但し、立候補者一人の場合は信任投票となります。

同窓会選挙規定

第５条　　会長選挙立候補者の所信表明開示
　　１　会長選挙立候補者は、所信表明を会報において正会員に開示しなければならない。
　　２　会長選挙立候補者は、正会員の中から少なくとも５名の推薦人氏名を公開しなければならない。

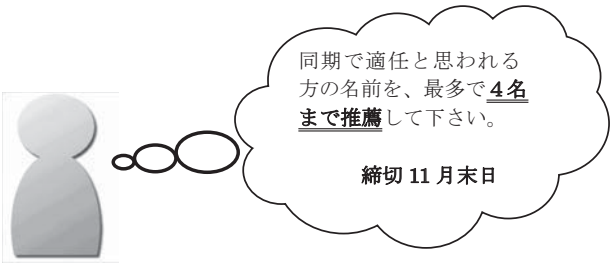
同窓会理事選挙

現在の理事は、平成26年３月に任期満了となりますので、会則９条及び会則25条にもとづき、選挙を施行します。つきましては、各卒年同窓の推薦をお願いします。

理事選挙の流れ

【理事候補の推薦】

９月に、理事推薦用紙をお送りします。
同期で適任と思われる方の名前を、最多で４名まで記入し11月末日までに返送してください。
立候補もお待ちしています。



【理事信任投票】

推薦が出揃いましたら、理事候補一覧を作成し、
翌年の２月にお手元にお送りしますので、信任・不信任を記入の上、返送ください。

◆会長選挙及び理事選挙　タイムスケジュール◆

2013年 9月	10月	11月	12月	2014年 1月	2月	3月	4月	総会開催月
告示 推薦・立候補		理事推薦・立候補　返信締切（末日）	会長立候補締切（20日）		会長選挙 理事選挙	投票		投票締切

会則及び同窓会選挙規定は讃樹會HP「会則」で、
今期の執行部、理事名は、同HP「役員」でご確認下さい。➡　http://www.kms.ac.jp/~dousou/

同窓生教授就任挨拶

同窓の皆様へ、山陰の新しい拠点のご案内

―教授就任ご報告―

鳥取大学医学部病態解析医学講座分子薬理学分野
冨田　修平（平成２年卒、第５期生）

讃樹會会員皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。この度、鳥取大学医学部病態解析医学講座分子薬理学分野の教授に就任いたしました。まずは、母校の恩師諸先生方をはじめ同級生の皆様、同窓の先輩後輩の皆様に、感謝の気持ちとともにご報告申し上げます。

まず、私の略歴を紹介させていただきます。私は平成２年に香川医科大学を卒業後、基礎医学を志し、当時生化学教室を主宰されていた初代教授市川佳幸先生に師事して、米国留学から帰国後も、引き続き現在の生化学教室教授上田夏生先生のもとで、助手（現在の助教）として母校にて研究･教育に従事しました。従って学生生活を含め約17年の期間を母校でお世話になりました。その後、共同研究を契機として隣県にある徳島大学に移り13年間過ごした後、この度、昨年７月に鳥取大学に異動となりました。徳島大学在任中は、香川医科大学勤務時代に同じ基礎研究棟７階におられた、現在徳島大学で薬理学分野を主宰されている玉置俊晃教授に大変お世話になりました。

鳥取大学医学部は、鳥取県米子市にあり、私たちの教室は、米子城跡を抱える湊山を傍らに中海に面した総合研究棟の４階にあります。教室のバルコニーから見える、眼下の県立湊山公園の四季折々の色彩豊かな風景と、そのすぐ向こうに広がる中海と空の色彩調和は、一日の疲れを癒すのに十分な風景です。また、毎年開かれる米子市夏祭りの花火大会では、教室のバルコニーが中海から上がる花火を間近に鑑賞する絶好の場所となります。

そのような私たちの教室は、戦中の昭和20年に旧制官立米子医学専門学校が設立されたと同時に当分野の前身である薬理学教室として開設されました。九州大学から初代教授の田中潔先生と第二代教授の君島健次郎先生が赴任され、鳥取大学の神経薬理学研究の発展に多くのご功績を残されています。その間、米子医専は、旧制米子医科大学に昇格、更に昭和24年には新制大学鳥取大学へと変遷を遂げます。更に、東北大学から赴任された第三代の佐藤慶祐教授は、鳥取大学の循環薬理学の道を新たに開かれ、平成15年には、教室名称を現在の分子薬理学分野に改名されました。そして、佐藤慶祐教授の後任の第四代教授として冨田が昨年着任しました。この度このような伝統のある教室を主宰することとなり、関連学問領域に対して、あるいは社会に対して、本教室よりどのような情報を発信して貢献出来るかを考えると身の引き締まる思いです。

讃樹會同窓の一員として、今後同窓の皆様に発信できることはなにかと考えましたが、母校とは異なる地方大学における大学人としてのあり方のようなものを提示できればと考えています。しかし、やはりその基本方針は、香川医科大時代に培われた考え方そのもので、基礎・臨床医学を志す母校の後進の育成と地方大学からのオリジナルな情報発信です。

教室バルコニーから中海（錦海）を臨む

また、鳥取大学に着任が決まって初めて知ったことですが、讃樹會会員名簿（2011年版）によると、讃樹會会員の勤務先として鳥取大学は勿論県内の施設が一つも含まれていないことに気付きました。他の46都道府県には、勤務先としてあるのですが、唯一鳥取県にはなかったのです。私が着任したことにより、同窓会員のネットワークが広がったことになります。現時点での同窓会への貢献はその程度ですが、これから山陰の地より讃樹會同窓の輪を拡げていきたいと思います。まずは、壮大な自然と豊かな食材のある山陰を楽しみつつ、讃樹會同窓会員として恥じぬよう着任地の鳥取大学での後進の育成に力を注ぎたいと考えています。

今後ともご指導ご鞭撻賜りますよう深くお願い申し上げます。

冨田　修平
〒683-8503 米子市西町86番地
鳥取大学　医学部 病態解析医学講座　分子薬理学分野
電話：0859-38-6161（直通）0859-38-6163（研究室）
FAX：0859-38-6160
Email: tomita@med.tottori-u.ac.jp

略歴

昭和40年	香川県生まれ
平成２年３月	香川医科大学（現香川大学）医学部医学科卒業
平成６年３月	同大学医学研究科博士課程修了
平成６年４月	同大学医学部医学科　助手
平成８年６月	米国国立衛生研究所　客員研究員
平成11年４月	香川医科大学医学部医学科　助手
平成13年２月	理化学研究所免疫アレルギー科学総合研究センター　研究員
平成14年４月	徳島大学ゲノム機能研究センター　助教授
平成16年４月	徳島大学ゲノム機能研究センター　准教授
平成17年４月	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部　准教授
平成24年７月	現職

教授退官挨拶

人喫飯、飯喫人

小林　良二

私は土地緊縛型のタイプではなく、信州大学、シカゴ大学、ピッツバーグ大学、ベイラー医科大学、秋田大学、名古屋大学、そして香川大学と移動を繰り返してきました。研究テーマに変わりはありませんが、看板は、内分泌内科学、生化学、薬理学、化学、生体情報分子学と書きかえ続けてきました。それ故でしょうか、定年退職に際して讃樹會の皆さまに“どのようにお伝え申し上げれば良いのか”思いあぐねています。ともあれ、感謝とエールの気持ちで一杯です。

香川大学医学部は優秀？

優秀です。勇気を持って前進して頂きたいと願っています。国試合格率が高いと、「私たちのカリキュラム改定の成果だ」と自慢し、下がると「学生さんが悪いとか、基礎医学教育が悪い、いやいや臨床医学教育のせいだ、はたまた教養教育のせいだ、、」などと他罰的言葉が飛び交っていました。この種の言説の無定見さは言うまでもありません。刹那の“評価”に惑い、小手先の“改革”に右往左往することなく、「本質」に徹して頂きたいと思います。定年退職に際して、香川大学医学部卒の若きエースからメールを頂きました。彼がNatureに発表した仕事は、とても魅力的です。無断でメールをご紹介します。『実験をしていれば、またいつの日か小林先生にお会い出来ると思い、生きておりましたので、あの日の夜、先生の隣で学生さん達に、言いたい放題、話をしていたことは、今考えても夢のような時間でした。今からちょうど10年前、なけなしの実験の知識と生涯実験をしたいという気持ちだけを頼りに上京致しました。当初より、想像以上の障害と試練の連続で何度もくじけそうになりましたが（思い出すだけで吐きそうになります）、続けてこられたのは、小林先生、徳光先生をただただ驚かせたいというシンプルな気持ちでした。この年にもなって、親に認めてもらうことを目的に勉強する子供のようで、本当にお恥ずかしい限りです。これからもPubMedを見ていて下さい。そして胸を張って先生の前で発表できる日を楽しみに、僕はこれからも走り続けたいと思います』彼の言葉の中にこそ香川大学医学部の「本質」が存在していると思います。香川大学医学部の皆さんが広い舞台で個性を発揮して下さることを念じています。

生命科学は面白い？

世は“利益誘導”の真っただ中のようですね。大学も、利益誘導型研究と利益誘導型教育に軸足を移してきたように思います。でも、大学の真骨頂は“学術そのもの”でしょう。利益誘導に惑わされず、楽しくて、面白くて、いつもハラハラドキドキの「研究」を志す人が増えることを期待しています。職業に対する人々の主観的な格付けを職業威信と呼ぶそうです。最近の結果では、医師、弁護士、大学教授、パイロットの順で、大学教授はトップから３位に低落したようです。研究者は７番目（国会議員の下、公認会計士の上）ですが、まあ、威信よりは楽しさでしょう。もっとも、医師で、研究者で、ついでに大学教授であれば、“cool”かも知れません。小林私塾の仲間たちは、いつの間にか一級の研究者になり、６人の大学教授が誕生しました。退職の際に行われたシンポジウムに参加した研究者の生の声をお届けします。真摯で楽しく知的な姿が伝わってきます。医学部から多くの生命科学者が誕生することを願っています。

「私もその研究仲間の一人としてカウントされ、あの場を共有できたことを、とても誇らしく思いました」

「私も何度となく研究生活の危機がありました。XXを辞めて、外国に移ったときは、もう二度と生きて帰れないかな、と思いましたが、、こうやって曲がりなりにも研究を続けられているのも、先生の言葉に支えられてきたからでした」

「先生からご指導いただいた大学院生時代が、私にとっても原点です。症例報告も含め、英文論文125編を発表できましたが、疾患の理解には、まだまだ遠い道のりです。これからも前進していきたいと思います」

「先生にご恩返しが出来ないのが心残りですが、小林イズムを踏襲して研究に専念します」

「先生のおかげで、XX研を経て、現在の私があります。本当にありがとうございました。こちらに来て、今までにない苦労を味わう事が出来ております。これも、人生修行においてある意味で仲間に恵まれているのかもしれません。研究者として、医療人の端くれとして真摯に生きて参りたいと思います」

「３月29日、30日は、昨年度の一番の思い出です。小林先生がおっしゃったこと、美しい高松市から活力

と癒しをいただきました」

何だか、生命科学者は楽しそうではありませんか？皆、輝いています。

香川大学は大丈夫？

うーん、なんだか心配です。キャンパス花いっぱい運動、サテライトオフィス、文学作品熟読、グローバル人材育成、瀬戸内芸術祭、希少糖など盛りだくさんなプログラムなのですが、、、、やればやるほど「大学」が忘れられて行くような気がしてなりません。人喫飯、飯喫人（正法眼蔵48巻）は、松岡正剛さんによれば、「飯を食わねば人ではいられぬが、人が人でいられるのは飯のせいではない。飯を食えば飯に食われるだけである」という意味なのだそうです。香川大学は“飯に食われた人”みたいですね。

香川大学憲章などでお題目化された「理念」に意味があるとは思いません。しかし、“university”という仕組みに通底する「香川大学の学術的風土」を生み出すことは大切です。それは、大学の本質を大切に育てることの中から生まれるのでしょう。香川大学で出会った“異質しかし最高の知性”で、しかも最高幹部であった先生の平明な言葉を無断でご紹介します。

『社会全般に「本質」をもっと重視すべきだと思います。いい例が鉄道の「エキナカ」、駅の中の商店街です。たしかに便利であることは否定しませんが、駅というのは本来「人を溜めないで流す」という機能が本質であり、エキナカは全く逆行していると思うのです。いうまでもないですが大学の本質は、毎年1000人を超える入学者にどういう能力を付与し、社会に送り出すかというところにあるはずですからね』

美しくたくましい香川大学になることを期待しています。そして、皆様の一層のご活躍を祈念しております。さて、自分自身の事ですが、「老梅樹、はなはだ無端なり」と信じ、真面目に過ごして行きたいと思っています。

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

医学と化学の新たな接点を求めて

香川大学医学部生体分子医学講座医用化学　教授
和田　健司

この度、平成25年４月１日より小林良二先生（生体情報分子学）の後任として香川大学医学部医学科医用化学教授を仰せつかりました和田健司と申します。この紙面をお借りして、讃樹會の諸先生方にご挨拶申し上げます。

私は福井県に生まれ、その後高校生までのほとんどを兵庫県伊丹市で過ごし（現在も両親は伊丹におります）、昭和58年に京都大学工学部石油化学科に入学しました。大学四年生の講座配属から始まった研究活動では、これまで一貫して、環境に優しい化学、すなわち「グリーンケミストリー」を可能にするような触媒の開発に取り組んで参りました。ただ、その対象となる反応や原材料等は、素晴らしい先生方との出会いとともに変遷しています。大学四年生および大学院生時代は、渡部良久先生（現京都大学名誉教授）、鈴木俊光先生（現関西大学名誉教授）のご指導のもとで、天然ガスや石炭、重質油といった資源をより有用な化学物質に効率良く変換する触媒の開発に従事し、その成果を博士論文にとりまとめ、平成４年に博士（工学）の学位を授与されました。その後、有機合成化学を得意とされる光藤武明先生（現京都大学名誉教授）の主宰される研究室のスタッフとなり、これまでの資源変換用の触媒技術を医薬品原料といったファインケミカルズの合成に適用するといった新しい仕事に取り組む機会を頂きました。さらに、セラミックス合成の分野で素晴らしい業績を挙げておられる井上正志先生（現京都大学名誉教授）をはじめとする諸先生方との出会いがあり、有機化学と無機化学の成果を融合することで、環境に優しい医薬品原料合成プロセスを可能にする新触媒を見出すことができました。こうしてみますと、研究上の新しい展開は、常に新しい分野の先生方との出会いがきっかけとなって拓けたように思います。

このように、この春までは、私はやや医学から遠い分野に軸足を置いて研究を続けて参りましたが、この度、香川大学医学部にて教育・研究に携わる機会を頂くにあたり、医用化学という新しい分野で新展開を切り開けるよう、一所懸命に頑張らねばと気を引き締めております。大変有り難いことに、香川大学医学部に着任してから幾人かの先生方と研究協力についてお話合いする機会がありましたが、私がこれまで思ってもいなかった視点から化学の知識が活かせるような提案もいただきました。今後も境界領域を見据えて勉学・研鑽を重ね、諸先生方との共同での研究を進めることで、医学と化学の新たな接点を見出し、発展させることができるのではと、期待に胸を膨らませております。

さて、この原稿を書いているのが７月初旬であり、４月の着任からはや３カ月が経ちましたが、その間、主として医学科二年生に対する有機化学の講義と、化学実習を担当して参りました。私は、自然科学全般を俯瞰するような力強い、骨太な知力を身につけることが重要であると考え、専門基礎教育に取り組んでいます。これからの医学の進歩に伴い、広範な自然科学、あるいは社会科学や人文科学における様々な分野と医学との接点はますます増えてくるのではないか、その際にはサイエンス全体を俯瞰できる知力がおおいに発揮されるのではないでしょうか。限られた期間内に骨太な学力をつけることは決して容易ではありませんが、医学科の学生諸君は、高い向学心や使命感をもって真剣に勉学に取り組み、期待に応えてくれています。こうした素晴らしい学生諸君に化学教育を行えることは、私にとって大いなる喜びです。

このように、香川大学医学部に着任して以来、知の湧源を前にして、毎日新鮮な気持ちで教育と研究に取り組んでいます。少しでも香川大学医学部の発展に寄与できるよう、頑張る所存でございますので、讃樹會の諸先生方には今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうかよろしくお願い申し上げます。

略歴

昭和62年３月	京都大学工学部石油化学科卒業
平成４年３月	京都大学大学院工学研究科博士後期課程石油化学専攻修了
平成４年４月	京都大学工学部助手
平成８年４月	京都大学大学院工学研究科　助手
平成13年５月	カナダ・ブリティッシュコロンビア大学客員研究員（長期出張、平成14年３月まで）
平成15年12月	京都大学大学院工学研究科　講師
平成22年12月	京都大学大学院工学研究科　准教授
平成25年４月	香川大学医学部医用化学　教授

新任教授就任挨拶

教授就任にあたって

―香川での18年を振り返って―

香川大学医学部病理病態生体防御医学講座炎症病理学　教授
上野　正樹

この度、平成25年６月１日付にて、阪本晴彦先生の後任として、香川大学医学部・病理病態生体防御医学講座・炎症病理学教授を拝命いたしました。この場をお借りいたしまして香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の皆様方にご挨拶申し上げます。

私は、大阪、尼崎で生まれ育ち、倉敷市連島町の小学校を卒業後は、京阪神で過ごしました。しかしながら、昨年亡くなりました親父は、香川県の大川町冨田で生まれ育ち、松尾小学校、旧制大川中学から三本松高校を卒業しました東讃の人間で、上野家先祖代々の墓も大川町にあり、香川は第二の故郷と考えています。

私が香川大学医学部に来ました経緯は、当時、主任教授の阪本晴彦先生が主宰されておられました香川医科大学第二病理学教室に、平成７年に研究生として入らせていただいた事に始まります。その後、４年半の研究生、２年半の助手、11年の助教授～准教授生活を経まして、この度昇任させていただきました。旧第二病理学教室への最初の在籍から18年以上経っておりますので、教室の業務は熟知しているつもりで御座います。初代教授の宇多弘次先生、二代教授の阪本晴彦先生が築きあげてこられました旧第二病理学教室の伝統を守りつつ、新しい病理学を発展させていくべく努力を重ねていきたいと考えております。

香川での18年を振り返ってみますと、いろいろな思い出があります。まず、最初に、京都の武田病院に勤務していたころからの友人（当時、旧第二病理学の大学院生）から阪本先生を紹介していただき、旧第二病理学教室での研究生活を出発させ、大変緊張していたことが思い出されます。しかしながら、老化促進モデルマウスという扱いなれたマウスに触れていると妙に落ち着いた記憶も御座います。場所が違ってもやる事は同じです。ただ、ひたすら、マウスの尾静脈からトレイサーを注射し、そのトレイサーが血管外へ漏れているところの脳血管の超微形態を観察していきました。10年あまりの期間で１万枚ほどの電顕写真を撮ったようです。忙しければ、何か気が紛れるのでしょうか？それでも、平成11年10月に助手に採用された時の喜びはひとしおで、忘れはしません。ただただ、阪本先生に感謝し、さらに、研究、教育、病理解剖および診断業務に励めたと思います。私自身が研究継続に苦労しましたので、今後、研究を続けたい若手研究者の先生にはできるだけ門戸を開放し、場の提供を行っていきたいと考えています。助手に採用されてからも、香川大学医学部の先生方にはいろいろ親切にしていただきました。飲食しながら朝方まで語りあったのも昨日のように思い出されます。また、共同研究がうまくいったときの嬉しさは言葉に表しがたいものがあります。神経細胞脱落から水頭症を発症しているノックアウトマウスにおいて、胎児期の大脳皮質の神経細胞が集団でタネル染色陽性のアポトーシス死に陥っている所見を見出した時は共同研究者とともに喜びを爆発させました。神経細胞のアポトーシス死というのは簡単には観察できるものではないと考えられますが、それを一目瞭然に観察できた（未熟な神経細胞のアポトーシス死の機序の一つを明らかにしたものと考えています）瞬間におけるドーパミンの大量分泌という経験は、若い先生方にもぜひ経験して欲しいと思います。ただ、一度、経験しますと、もうやめられませんので、ご注意ください。

末筆になりましたが、私は現香川大学医学部におきまして、助教授～准教授としては11年間、阪本先生とともに病理学の講義を行ってきましたが、内科医を目指すにあたっても病理学を学ぶことの重要性は年々増していると感じています。それ故、医学生には熱意を持って病理学の重要性を伝えていきたいと考えていますので、讃樹會の先生方には今後ともご指導ならびにご鞭撻の程お願い申し上げます。

略歴

昭和60年３月	京都大学医学部卒業
昭和60年５月	京都大学医学部附属病院研修医
昭和61年４月	宇部興産中央病院
昭和63年４月	京都大学医学部大学院入学
平成４年４月	医仁会武田総合病院
平成５年４月	康生会武田病院
平成５年11月	京都大学医学部大学院修了
平成６年４月	New York State Institute for Basic Research in Developmental Disabilities
平成７年１月	赤心会赤沢病院
平成７年５月	香川医科大学医学部・第二病理学・研究生
平成11年10月	香川医科大学医学部・第二病理学・助手
平成14年４月	香川医科大学医学部・第二病理学・助教授
平成25年６月	香川大学医学部・炎症病理学・教授

ニュースの窓

ヒトiPS細胞からエリスロポエチン産生細胞を作り出すことに成功　4/23

香川大学医学部薬理学（人見浩史助教、西山成教授）と京都大学iPS細胞研究所（長船健二准教授）が中心となって実行された共同研究プロジェクトで、世界で初めてヒトiPS細胞・ES細胞、およびマウスのES細胞から、高濃度のエリスロポエチンを産生する細胞を作り出す方法を確立したことが香川大学医学部で発表されました。

エリスロポエチンは、主に腎臓で産生され、骨髄に働き赤血球の産生を促すホルモンですが、透析患者さんのように腎臓が障害されてしまうと、エリスロポエチンの産生が減少するため、赤血球が作られず、非常に重い貧血を生じます。

これに対して、遺伝子を組み換えて作ったエリスロポエチンはとても有効な薬であり、いまや全国で30万人を超す透析患者さんの約８割に投与されています。しかしその一方で、国内で年間900億円が用いられ、医療コスト増大による医療費の圧迫や、一部の患者さんでは効果が弱いなどの問題がありました。

今回の研究では、ノーベル医学生理学賞を受賞した京都大学山中伸弥教授が樹立したiPS細胞から、ヒトの体内にあるエリスロポエチン産生細胞と同様の特徴を持つ細胞を作り出す技術の開発に成功しました。さらに貧血動物を使用した実験で、この細胞から分泌されるエリスロポエチンが、現在使用されている遺伝子組み換えエリスロポエチンと比べても、同等以上の貧血改善効果を発揮することが証明されました。

今後は、iPS細胞から作り出したエリスロポエチン産生細胞の臨床応用を目指すとのことです。この技術により、医療コストの軽減、生理的な貧血治療、さらには市販のエリスロポエチンが効かない透析患者の特効薬となる可能性が見えてきました。

記者会見の様子

実験室での人見助教

卒後臨床研修プログラム説明会の開催　4/22

卒後臨床研修センターによる、2014年ULTRA MAMDEGANの説明会が学内の食堂オリーブで開催され、医学科５年生・６年生64名の参加がありました。

診療に従事しようとする医師の２年以上の臨床研修が必修化されたのが2004年であり、早いもので10年が経過しました。

田宮隆センター長の挨拶に続きプログラムの説明が行われ、更に今回「卒後臨床研修10周年記念」ということで、学内に勤務する卒業生が卒年別に10名勢ぞろいし、これから研修病院を選択する後輩たちに、同窓であり先輩医師としての率直なメッセージを送りました。

「大学では重症の症例を扱うことが多いが、重症を知ることで軽症を見分けることができる」「女性医師へのサポート体制が非常に手厚い」「他病院も見学したが、数日の病院見学では表面しかわからない。最終的には、同期が多く、近い先輩の多い母校を選んだ」「６年間の学生時代の恩返しの意味でも母校を選んだ。専門については大いに悩むものであり、一生続けても楽しめる科を選ぼう」「学生の時に今いちであっても、大学の多くの先生方のおかげで、出来る人になっていく。」「人が多いことが大学の力につながる」「何となく過ぎていかず、きっちり勉強できるのが大学病院の特徴の一つ」「大学と外病院の両方を経験できるように組み立てられたMANDEGANはかなり柔軟である」「消化器外科にいるが、手術が多く、初心者だった自分が次の年に出来るようになっていて、その“出来るカーブ”がすごい角度」「大学に残るか、外に出るか、決め手のようなものは無い。ただ、母校は考えて

熱心に耳を傾ける５、６年生

いる以上にアドバンテージが高い。人間関係やモチベーションの支えとなるのが母校」「香川大学は君たちにとって“ホーム”。後輩は永遠に増え続ける。」など、経験年数に応じた意見が真摯に述べられました。年代別の卒業生10人が一斉に並ぶ姿は、後輩の学生の目に非常に頼もしく映ったであろうと思います。

最後に副センター長の松原先生が、研修制度は10年間の変遷があり、だんだん良くなって今があること、非常に自由度が高くなってきており、協力型病院もしっかり協力してくれていること、若い先生が増えて、大学も病院も元気になってきたことを伝えました。

卒年順に経験談やアドバイスを話す先輩医師

平成25年度香川大学入学式　医学科新入生は109名　4／4

４月４日（木）、香川大学幸町キャンパスにおいて、平成25年度入学式が執り行なわれました。午前９時から大学会館において大学院入学式が、引き続き午前10時から大学講堂において学部の入学式が行われました。

大学院の新入生は317名で、内訳は教育学研究科49名、法学研究科６名、経済学研究科11名、医学系研究科36名、工学研究科118名、農学研究科57名、地域マネジメント研究科34名、香川大学・愛媛大学連合法務研究科６名となります。

学部新入生は1318名で、内訳は教育学部205名、法学部164名、経済学部308名、医学部169名、工学部273名、農学部162名、編入学37名となり、医学部169名の内、医学科は109名、看護科は60名です。

入学式会場の医学部新入生

新入生の入学を心より歓迎し、今後の健闘を期待する意味を込め、今年度は、長尾学長をはじめ、役員、部局長はアカデミックガウンを着用した、正装での式典となりました。

学長からの告辞では「大学で過ごす４年又は６年は、最も自由で自己形成をするチャンスであり、この貴重な時間をどのように使うかは皆さんの覚悟と決意、真剣度にかかっている。」との言葉がありました。

午後は、学部新入生はオリエンテーリングのため各学部キャンパスへ移動しました。バスを降りるなり、待ち構えていた先輩たちのサークル勧誘や歓迎の列に迎えられ、大学入学の晴れがましさに包まれていました。

長尾学長

午後は医学部キャンパスに

医学部駐車場にカーゲート設置　6／1

医学部キャンパスの長年の懸案事項であった駐車場の狭隘化を改善するため、医学部附属病院及び医学部駐車場にカーゲートが設置され、有料化されました。

設置場所は病院用駐車場に４か所、医学部用駐車場には６か所です。

医学部駐車場のゲートは①医学部正門、②東通用門、③北通用門に加えて、④管理棟西側、⑤新しくできた立体駐車場、⑥東通用門から少し下がった場所にできた平面駐車場のそれぞれです。【図参照】

料金は、病院の外来患者は８時間までは無料です。職員は月額3000円、その他の一般来訪者は150円／30分となっています。

４層５段の立体駐車場は、プール南側のテニスコートが野球部グラウンド東側に移設され、その跡地に新設されました。

立体駐車場の収容能力は647台で、平地の駐車スペースと合わせると1700台程度が駐車可能となりました。職員・学生の駐車が滞りなくできる広さです。ただ、平地の駐車場は午前８時前にはほぼ満車となるようですので、歩く距離は倍近くになりますが、かなりの職員が立体駐車場を使用しています。立体駐車場の３階から高架で大学敷地とつながっていて近道もできます。道路脇や植え込み横にされていた何台もの縦列駐車は、現在、すっかり見られなくなりました。

なお、本学関係機関で、本学の業務による入構が必要な場合は、割引認証等により無料による対応も可能ということですので、該当する場合は、庁舎係にお問い合わせください。また、学外関係者の入出構は、医学部正門及び東通用門の２カ所（入構：５時～22時のみ・出構：24時間可能）のみとなります。

医学部正門

東通用門

建設が進む附属病院新病棟　8／1

2012年４月から建設工事に着手した新病棟。地下１階、地上８階建で、2014年３月完成・2014年７月運用開始予定で、１階に救命救急センターを移設、３階に心臓血管センターが新設され集中治療部も拡充されます。新病棟の完成後は、既存病棟等の改修工事が始まり、2019年春頃にリニューアル工事を終える予定です。

病院正面。建設中の新病棟が姿を見せている。

病院裏（東側）から見た様子

平成25年度 第１回　国外留学助成金 選考結果

下記２名の先生に平成25年度第１回国外留学助成金の授与が決定しました。
両先生の益々のご活躍をお祈り申し上げます。

垂水晋太郎（平成14年卒）　香川大学医学部附属病院　呼吸器乳腺内分泌外科

留学先機関：the Latner Thoracic Surgery Research Laboratories.University of Toronto
研究課題　：肺組織における幹細胞に関する研究、
　　肺移植に関する基礎、臨床研究

【受賞のコメント】
この度は国外留学助成金を賜り誠にありがとうございます。髙橋会長をはじめ、讃樹會会員の皆様に深く御礼申し上げます。私は卒後、母校の第２外科（現、呼吸器・乳腺内分泌外科）に入局し、現在に至るまで臨床・研究を中心に取り組んで参りました。この度、横見瀬裕保教授の御厚情により、トロント大学、トロント総合病院胸部外科、Latner Thoracic Surgery Research Laboratoriesに留学する事となりました。肺移植をはじめ呼吸器外科領域全般で世界有数の臨床、研究業績を挙げている施設であり、その研究者や設備のレベルには驚かされる事ばかりです。こちらでは、大学で行っておりましたCirculating tumor cellsやInfraredを用いたoptical deviceの研究に加えて、所属するグループのメインテーマでもあるStem-cellを使用した研究も併せて行う予定です。こちらで行いました研究を母校に還元出来るよう、これまで以上に努力する所存です。今回の留学に際し、多くの方々にたくさんの支援を賜りました事、この場を借りて深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

宍戸　　肇（平成16年卒）　香川大学医学部附属病院　脳神経外科

留学先機関：University of michigan health system
留学期間　：平成25年６月～平成27年５月
研究課題　：脳出血における脳損傷の機序及び神経保護の機序の解明
　　・脳内出血後に生じる脳浮腫における鉄代謝の関与について証明
　　・脳出血後の神経退行性変化について検討

【受賞のコメント】
この度は国外留学助成金を賜り、誠にありがとうございます。私は脳神経外科医として勤務しております。研究テーマはくも膜下出血後の急性水頭症です。大学病院では救命救急センターにも１年間勤務し、様々な脳血管障害を経験させていただきました。その後香川県立中央病院及び滝宮総合病院では主に脳卒中患者を急性期から慢性期にかけて対応させていただきました。従事中、くも膜下出血後急性期に脳循環不全を来し、後遺症を来す患者に出会うことがあります。脳循環不全の原因の１つとして、急性水頭症があります。治療としては保存加療あるいはドレナージ術が一般的ですが、病態をさらに検討し、新たな治療戦略の可能性を模索していこうと考えております。留学先はミシガン大学であり、当院脳神経外科からは20年連続留学し、多くの業績を残しております。もちろん全世界からも多くの留学生を受け入れており、彼らと討論を重ねながら、最先端の研究をすることは貴重な財産となります。今回の留学を充実させるにあたり多くの方々の御指導、御鞭撻及び多大な御支援をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

理事会議事録

平成25年度第１回　平成25年８月12日（月）20：00～21：00

議長　大西理事長から委任されて横井徹理事が議長代理を務めた。

１．国内留学助成金の審査・決定

大森学術局長から、25年度第一回国外留学助成金に２件の申請があり、第一次審査（書類審査）で不備がなかったことが報告された。選考基準にのっとり参加理事全員による第２次審査が行われた結果、垂水晋太郎先生と、宍戸肇先生の助成を決定した。

２．研究助成金及び研究奨励金の審査・決定

大森学術局長から選考過程の説明が行われた。外部評価委員による採点結果をふまえて、研究助成金部門は松田陽子先生、研究奨励金部門は中村信嗣先生の受賞が満場一致で承認された。

尚、前回理事会にて、審査におけるヒューマンエラーの防止策が検討されたことを受け、今回から、５段階評価の点数と評価を併記した採点表で評価いただいたことが報告された。

３．H24年度決算の承認

舛形事業局長から平成24年度決算報告が行われた。収入面では会費収入が予定より多く、事業支出面は予定より下回ったため、プラスの差額が出て次年度へ繰り越せたことが報告された。続いて、横井議長代理により、二見・岩村会計事務所の監査報告書及び形見委員長から提出された監査報告書が読み上げられた。決算報告及び監査報告に対して、拍手をもって理事会全員一致の承認があった。

４．H25年度予算の審議・決定

舛形業局長から平成25年度予算案が上程され、理事会満場一致の拍手で承認された。

医学部駐車場有料化に伴い、事務局事務員の駐車料金を雑費に組み込むことが承認された。

５．その他

平成26年・27年度会長選挙及び理事選挙について議長代理から告知され、松本義人選挙管理委員長の確認をいただいた。

平成24年度会計報告及び平成25年度予算

平成24年度収支計算報告書

平成24年４月１日から平成25年３月31日まで

事業活動収支の部　単位：円

科　目	予算A)	決算B)	差異A)－B)
１．事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,000,000	9,232,000	－1,232,000
②寄付金・広告収入	1,300,000	1,244,580	55,420
③委託手数料収入	900,000	1,115,069	－215,069
④雑収入		5,183	－5,183
事業活動収入計	10,200,000	11,596,832	－1,396,832
２．事業活動支出			
① 事業費支出			
会報制作費	750,000	759,990	－9,990
後援協賛事業費	500,000	476,270	23,730
支部・同期会費	300,000	357,760	－57,760
学術助成金事業費	2,600,000	2,815,310	－215,310
学生援助費	850,000	939,115	－89,115
国際交流協力費	500,000	100,000	400,000
研修医協力費	550,000	492,208	57,792
講演会費	500,000	465,345	34,655
総会費	500,000	498,735	1,265
学会助成金事業費	500,000	0	500,000
事業費支出小計	7,550,000	6,904,733	645,267
②管理費支出			
事務人件費	2,000,000	2,019,600	－19,600
事務局・各委員会運営費	1,000,000	617,283	382,717
事務局設備投資費	100,000	0	100,000
通信費	600,000	502,680	97,320
慶弔費	300,000	260,000	40,000
雑費	100,000	76,171	23,829
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000	0
管理費支出小計	4,200,000	3,575,734	624,266
事業活動支出計	11,750,000	10,480,467	1,269,533
３．事業活動外収入			
助成金返還		225,000	－225,000
事業活動外収入計		225,000	－225,000
当期事業活動収支差額	－1,550,000	1,341,365	－2,891,365
前期繰越収支差額	30,928,306	30,928,306	
次期繰越収支差額	29,378,306	32,269,671	－2,891,365

貸　借　対　照　表

平成25年３月31日現在

単位：円

資産の部	金　額	負債及び正味財産の部	金　額
資産		負債	
１．流動資産	(32,490,471)	１．流動負債	(220,800)
現金・預金	32,490,471	未払金	220,800
		２．固定負債	(16,000,000)
２．固定資産	(16,000,000)	同窓会館建設引当金	16,000,000
同窓会館建設引当預金	16,000,000		
		正味財産	32,269,671
合　計	48,490,471	合　計	48,490,471

財　産　目　録

平成25年３月31日

単位：円

資産の部				
１．流動資産				
(１) 現金・預金				
イ) 手許現金		60,201		
ロ) 普通預金	百十四銀行三木支店	836,087		
ハ) 郵便貯金	郵便振替貯金事務センター	20,336,445		
ニ) 定期預金	香川銀行本店営業部	10,184,002		
	百十四銀行医大前出張所	1,073,736		
	流動資産合計		32,490,471	
２．固定資産				
(１) 特定目的資産	同窓会館建設引当預金	16,000,000		
	固定資産合計		16,000,000	
	資産合計			48,490,471

監査報告書

平成２５年４月２４日

香川大学医学部医学科同窓会
讃樹會会長　高橋則尋　殿

公認会計士　岩村浩二

私は、香川大学医学部医学科同窓会讃樹會の平成２４年４月１日から平成２５年３月３１日に至る平成２４年度決算報告書の監査を実施した結果、収支状況及び財政状態を適正に表示されているものと認めます。

以上

監査報告書

平成25年4月1日

香川大学医学部医学科同窓会
讃樹會　会長　高橋則尋　殿

監査委員長　形見博彦

讃樹會監査委員会は、平成24年4月1日から平成25年3月31日に至る平成24年度決算報告書の監査を実施した結果、適正妥当に表示されているものと認めます。

以上

◆平成25年度予算

平成25年度予算

平成25年４月１日から平成26年３月31日まで

事業活動収支の部

科　　目	25年度予算	H24年度予算	平成24年度決算
1.事業活動収入			
①会費・入会金収入	8,000,000	8,000,000	9,232,000
②寄付金・広告収入	1,300,000	1,300,000	1,244,580
③委託手数料収入	1,300,000	900,000	1,115,069
④雑収入			5,183
事　業　活　動　収　入　計	10,600,000	10,200,000	11,596,832
2.事業活動支出			
① 事業費支出			
会報制作費	750,000	750,000	759,990
後援協賛事業費	500,000	500,000	476,270
支部・同期会費	500,000	300,000	357,760
学術助成金事業費	2,600,000	2,600,000	2,815,310
学生援助費	850,000	850,000	939,115
国際交流協力費	500,000	500,000	100,000
研修医協力費	550,000	550,000	492,208
講演会費	500,000	500,000	465,345
総会費	0	500,000	498,735
学会助成金事業費	500,000	500,000	0
事　業　費　支　出　小　計	7,250,000	7,550,000	6,904,733
②管理費支出			
事務人件費	2,000,000	2,000,000	2,019,600
事務局・各委員会運営費	1,000,000	1,000,000	617,283
事務局設備投資費	300,000	100,000	0
通信費	600,000	600,000	502,680
慶弔費	300,000	300,000	260,000
雑費	100,000	100,000	76,171
香川大学同窓会連合会費	100,000	100,000	100,000
管理費支出小計	4,400,000	4,200,000	3,575,734
事　業　活　動　支　出　計	11,650,000	11,750,000	10,480,467
3.事業活動外収入			
助成金返還	0		225,000
事　業　活　動　外　収　入　計	0		225,000
当期事業活動収支差額	-1,050,000	-1,550,000	1,341,365
前　期　繰　越　収　支　差　額	32,269,671	30,928,306	30,928,306
次　期　繰　越　収　支　差　額	31,219,671	29,378,306	32,269,671

速報　平成25年度 讃樹會研究助成金/研究奨励金 選考結果

部門	受賞者	研究題目
研究助成金	**松田　陽子** （平成10年卒） 日本医科大学 病理学（統御機構・腫瘍学）	幹細胞マーカーnestinのリン酸化制御による 膵癌分子標的治療の研究
研究奨励金	**中村信嗣** （平成16年卒） 香川大学医学部附属病院 小児科	新生児低酸素性虚血性脳症における 新しい脳保護戦略への挑戦

第９回（平成25年度）香川大学医学部医学科同窓会讃樹會研究助成者及び研究奨励者が決定しました。

今回、全10件（研究助成金部門７件、研究奨励金部門３件）の応募に対しまして、10名の外部評価委員による厳正なる評価が行われました。

具体的には１名の外部評価委員に対して、７件分の申請の採点をお願いしその結果、各申請者に対して均等に７名の外部評価委員からの評価を得ることができました。

採点は６つの項目（１．研究課題の学術的重要性・妥当性、２．研究計画・方法の妥当性、３．研究課題の独創性・革新性、４．研究課題の波及性、５．研究の実現性、６．研究の学術的優先度）に対して、それぞれ５段階評価を行って頂き、合計点を平均しました。

その結果、研究助成金部門では松田陽子先生が4.47点の最高得点を獲得され、研究奨励金部門では、中村信嗣先生が3.88点の最高得点を獲得されました。全体の平均点は3.71点／５点となりました。

外部評価を基に理事会において、松田陽子先生に金壱百万円、中村信嗣先生に金五十万円を授与することを正式に決定しました。両先生には、心よりお喜び申し上げるとともに、研究の益々のご発展をお祈り申し上げます。

外部評価委員の先生方におかれましては、大変お忙しい中、無償でご協力頂きましたことを誌上からではございますが、心から感謝申し上げます。

讃樹會研究助成　学外評価委員

臨床科

香美　祥二	徳島大学医学部医学科発生発達医学講座　小児医学　教授
成瀬　光栄	京都医療センター　内分泌代謝センター内分泌研究部　内分泌研究部長
森田　　潔	岡山大学　学長
吉栖　正生	広島大学大学院医歯薬学総合研究科　創生医科専攻　探索医科学講座　心臓血管生理医学教授兼広島大学医学部長

基礎科

梶谷　文彦	川崎医療福祉大学特任教授／岡山大学特命教授／医療技術産業戦略コンソーシアム（METIS）共同議長
島田　眞久	大阪医科大学　名誉教授
西堀　正洋	岡山大学大学院医歯薬学総合研究科機能制御学講座　薬理学　教授
藤田　　守	中村学園大学　栄養科学部　栄養科学科　教授
三浦　克之	大阪市立大学大学院医学研究科　薬効安全性学　教授
森田　啓之	岐阜大学大学院医学系研究科　神経統御学講座　生理学分野　教授

（敬称略）

	第１回 H17	第２回 H18	第３回 H19	第４回 H20	第５回 H21	第６回 H22	第７回 H23	第８回 H24	第９回 H25
研究助成金最高点	4.25	3.30	4.09	4.17	4.29	3.98	4.03	4.07	4.47
申請件数	8	2	4	1	6	3	1	6	7
研究奨励金最高点		3.61	3.55	4.15	3.69	4.64	3.83	3.70	3.88
申請件数		2	3	3	3	6	4	4	3
総average	3.64	3.46	3.86	4.01	3.68	3.82	3.91	3.45	3.71

近況報告

私の半生と医師業の中断から本吉病院での復帰まで

岩本　隆志（平成20年・2008年卒）

私がこの同窓会（讃樹會）報に寄稿するというお話を頂いてから、まず、考えたのは、在学中から御世話になった先生方や先輩・同級生・後輩の方々に、今の自分の近況報告をしたいということ、さらに（少し前の）私のように医師として行き詰まり、迷路に陥ったように悩んでいる方が、僅かばかりでもいるはずで、そんな人々が新たに一歩を踏み出す何らかのヒントになれば、という思いでした。

先輩後輩の皆さんと比べれば、医師としては落第にあたるような私の経歴ですが、あえて恥を忍んで書く気になったのは、このような気持ちになったからでした。

私の経歴を理解してもらうには、香川大学（入学時は香川医科大学）に、入学する前からのことも書かなければなりません。

①［成蹊大学～社会人～香川医科大学入学］

私はいわゆる再受験生で、一つ目の大学である東京の私立の成蹊大学・経済学部で４年間を過ごしました。卒業後、数年間スーパーマーケットや薬局店舗での販売員など社会人として過ごしました。しかし、何だかやりがいを見いだせないまま、悶々と過ごしていました。「このままでは、自分の人生に後悔してしまう。それならいっそ社会的には何もなくなってもいいから、自分の人生を見直してみよう。」それは、やりがいと希望のない日々に、半分追い詰められた末の行動でした。

人間は、社会的地位や安定した収入などを諦めて、守るべきものが無くなると案外強く大胆に生きられるものです。将来の為ではなく、今の自分のためにしたいことをしてみよう。その先に自分がやりたいことが見つかるかもしれない。

私が選んだのはインドへの個人旅行（約２か月）でした。とにかく日本とは価値観がまったく違う世界を見てみたいという思いからでした。社会的には無職となり、何の肩書きもない個人として旅して、様々な人間や場所を訪れて、感じたのは、人が生きるために本当に必要なものはそんなに多くない、むしろ自分にとって本当に大事なことをきちんと理解していれば、形にとらわれずに、何をしていてもいい。この時に感じたことは、今でも私の心の片隅にいつもある感覚です。

旅行中、カルカッタで立ち寄ったインド人の医師が主催するNGO（クリニック、小学校、海外との里親制度、農村女性のための銀行などの活動）で、地元の医師や海外からの医学生ボランティアなどに出会ったことが医学部を目指すきっかけになりました。もともと文系の大学出身であったので、受験勉強は大変でした。両親に経済的な援助を受けながら、予備校に３年半通って、幸運にも2002年に香川医科大学に合格することが出来ました。

②［香川大学卒業～千葉県立病院群での初期研修と後期レジデント１年目］

香川医科大学（在学中、香川大学医学部に変更）では、多くの先輩、同学年、後輩の皆さんに恵まれ、有意義で楽しい６年間を過ごすことができました。2008年に香川大学は無事卒業したものの、医師国家試験には、なんと落ちてしまいました。国試に通らなければ（当たり前ですが）医師として働けない、国試浪人者はリピーターが多い、自分は再受験生である、ことなどを踏まえ、１年間で国試に通るのに１番良い方法をと考え、私は東京のMACという予備校に通うことを選択し、東京で１年間過ごしました。恥ずかしながら、授業料やアパート代も親の脛かじりでした。

東京での１年間の浪人生活後、2009年に無事、国試に通ることができ、研修も関東で行うことにしました。千葉県の県立病院が医師不足の中、独自に医師を養成するために始めた千葉県立病院群というプログラムで2009年４月から２年間の初期臨床を行いました。

２年間の初期研修後、2011年４月から、千葉県内の県立病院の一つで内科医として後期研修を始めました。しかし研修が進むにつれ、いろんな点で行き詰ってしまいました。初期研修医のときに比べ担当患者を自分一人で診るようになり、負担が重くなってしまいました。

- 自分で判断する力が出来ていなかったことで、細かいことまで、上級医に聞くため、仕事が進まなくなった。
- 仕事が遅く、病院に遅くまで残り、疲れが溜まることで、さらに判断力が落ちる。
- 仕事をこなすことで精いっぱいになり、患者への対応・説明も疎かになる。

このように悪循環を繰り返し、早くも2011年８月頃には、病院長からも「後期研修医（そもそも医師としても）として遅れているから頑張るように」と発破をかけられる始末でした。頑張ろうともがけばもがくほど、悪循環がつのり、スタッフの信用も無くして行きました。このような状態で頑張れるのも数カ月が限界で、翌年の３月頃には、肉体的にも精神的にも、限界に達してしまいました。もはや仕事に関するやりがい

など無く、苦しさしか感じない状態でした。ついには、ある糖尿病とうつ病を抱えた患者さんに個室でなく病棟の待合のスペースで病状説明をしてしまったことで、プライバシーを侵害したと病棟で患者さんに殴られんばかりに怒鳴られるトラブルとなってしまいました。まさに、焦りと無知からの失敗でした。

院長先生から、様々なアドバイスをもらい、他病院で研修をやり直すこと、しばらく臨床を離れて基礎系の研究の教室に入ることなど、いろいろな提案を頂いたのですが、自分としてはこれ以上働くこと自体が限界でした。鬱病ではなかったとしても（後日、心療内科を受診したところ、そんなに客観的に自分を分析出来ているなら治療の必要はないと言われました）、まさに鬱状態でした。私が、鬱に関するいろんな本で学んだ結論は、鬱病の治療は、諦めと休むことに帰するというものでした。つまり自分の社会的地位を諦め、常に判断・結果を求められる仕事から離れ、体と心を休ませることが最善の策というものでした。医師としての経歴を中断することは避けなければならないという、院長先生のアドバイスを無視する形で、３月末で強引に病院を退職しました。中途半端な選択をしたら、本当にダメになってしまうという、自分自身を守るための必死の選択でした。こうして初期研修２年＋後期研修１年間で医師の経歴を中断することとなりました。

③［宮城県石巻市での活動：2012年５月～2013年５月］

千葉県から実家の山口県に戻り、父親としばらく過ごしました。このような身の置き所の無い不安定な状態のとき、家族とは本当に有難いものです。自分の苦しい心情を父親に話すことで、少しずつ客観的に考えられるようになった気がします。母親を医学部受験時代に亡くしてから、ともかくも自分を応援してくれる父親は本当に有難い存在でした。医師業を中断する勇気が何とか持てたのも父親の存在があったからです。

私が医学部を目指すきっかけにもなった古くからの友人が、2011年の東日本大震災で被災し、地元、宮城県石巻市で被災者でありながら、ボランティア組織を立ち上げ活動していました（「石巻市復興を考える市民の会」の代表、藤田利彦さん）。津波が自宅を襲い、２階を残して破壊、叔母さんとお母さんを亡くし、絶望のどん底になってもおかしくない状況でしたが、当初から遺体の捜索、炊き出し、瓦礫撤去、県外からのボランティアへのアドバイス、さらには行政との交渉と、休むことを忘れたかのように活動していました。

「肉体的・精神的に限界らしい、病院を辞めようかと思っている」旨の相談を、退職前に彼にしたとき、「石巻にきて、医療活動は全くしない形で一緒にボランティアをしないか」と勧められました。

このように医師としてではなく、１ボランティアとして（そして、純粋に被災者を救いたいという動機からでなく、どちらかというと自身の精神的なリハビリのために）、藤田さんの自宅兼事務所に居候しながら、石巻でのボランティア活動を2012年６月頃から始めました。藤田さんは、津波に被災して、肉親を亡くすという不幸極まりない状況で、なぜ休みなくボランティアを続けていられたのか？「津波で何もかも失って、肉親も家も財産も無くしたとき、周りの苦しんでいる被災した人達を見て、助けなければいけないと不思議に力が湧いてきた」そうです。それからの彼の活動はまさに怒涛のようで、守るものの無くなった人間の持つ強さを見るようでした。

「石巻市復興を考える市民の会」（以下、市民の会）の１ボランティアとして、支援物資の配布や側溝掃除、公民館や仮設住宅での炊き出しやイベント（コンサートやマジック、夏祭りや餅つき大会など）の手伝いなど、様々な活動をしました。料理や簡単な大工仕事など、都会ではお金で済むことを、なんでも自分ですることが被災地では求められます。ボランティア団体といっても数人しかスタッフがいないため、県外から、時にはバスをチャーターして炊き出しや作業のために来てくれる様々なボランティア団体との協力が不可欠でした。他団体との事前の作業・イベントの打ち合わせは最も重要な仕事で、特に被災地という分かりにくい特殊な場所で、限られた時間と人数と物資で、被災者にとって本当に役立つことをして、無事に帰路についてもらうことは、実は答えのない大変なことでした。しかし、多くの被災者の方々と医師という立場でなく直に会えたこと、様々なボランティアの方々（それまで会うことのなかったいろんな分野の方々）に、病院ではなく被災地で、会えたことは本当に貴重な経験でした。

仮設住宅での医療相談の後で。右端は本吉病院に地域医療研修で来られた研修医の先生。

2013年４月には、石巻市長選挙が行われ、市民の会の代表である藤田さんは、なんと（団体とは関係なく個人の立場で）市長候補として立候補しました。それは、ボランティアとして何らかの助けとなることができる問題には限界があり、仮設で暮らす被災者の住宅問題一つをとっても行政の関わりなしには解決しえないという考えからでした。

それまで投票にすら行かないこともあるほど、政治に無関心であった自分がまさか選挙の手伝いをすることになるとは思いもしませんでした。しかし、あらゆる利権やしがらみとは無縁の無所属の立候補者の選挙のマニュフェストについて考えることは、１自治体の生活全般について考えることでした。選挙活動は事前の手続きから初めての体験の連続で、選挙とはこんなにも多くの手続きと特殊な決まりごとの中で行われるのかと驚きの連続でした。候補者と選挙カーに乗って石巻市の津々浦々の場所に行き、そこで生活する人々の思いを聞くことも出来ました。残念ながら、選挙では現職に敗れたものの、個人的にはこれも貴重な体験となりました。医師という職業も医療という社会サービスを担っているわけですから、行政に関して無知であっていいわけがなく、政治に関心を持ち、自身の意見を持つべきだと思うようになりました。

④［本吉病院での後期研修再開：2013年６月～］

ボランティアを１年近くして、他人にとっても自分にとっても、医師として働くことがやはり一番望ましいと感じるようになりました。自分のような出来そこないの医師でも、一所懸命やることで、いくらかでも他人の役に立てるのではないか。そして、ある意味医療システムの一度壊れてしまった被災地こそ、自分に相応しいのではないかと。１年近くの大きなブランクは、やはり大きな心配でした。ある意味、１から医師業を研修し直すような覚悟が必要だけれど、果たしてそんな自分を受け入れてくれる病院が本当にあるのだろうか？

石巻内外、宮城県内で病院を探したところ、宮城県気仙沼市本吉町にある本吉病院のことを知りました。本吉病院は、１階部分が津波を受け、検査機器や外来部門が使用不能となり、さらには一時期、医師が不在となる事態に陥ったにもかかわらず、看護師さんを始め、スタッフの方々が、様々なボランティア医師の支援を受けながら、何とか外来などの医療サービスを継続した病院です。その後、川島院長が就任され、一人しか医師のいない状態のところへ齋藤副院長が加わり、少しずつ病院機能を回復していったのでした。

本吉病院で齋藤副院長に面談していただき、医師スタッフとして採用して頂くことになりました。しかも、本吉病院では日本プライマリ・ケア連合学会の「家庭医療後期研修医」（いわゆる家庭医）の研修を被災地の他病院と連携して行う独自のプログラムを立ち上げたところだったため、そのプログラムに則り、研修もさせていただくことになりました。

こうして、約１年間のブランクをへて、幸運にも医療現場に復帰することが出来たのでした。

2013年６月から本吉病院で働き始めました。本吉病院には、川島院長、齋藤副院長の他に、東北メディカル・メガバンク機構（後に説明）より２人の先生が３か月間の期限で赴任されていました。つまり計４人の医師、さらには定期的に病院を訪れて外来や当直を手伝って頂ける県外からの先生方もいて、指導を受けるにはこの上なく恵まれた環境でした。ほとんど１から研修をし直すような状態の私でしたが、先生方から一つ一つ指導を受け、少しずつ業務を覚えていくことが出来ました。病棟業務、外来、訪問診療（いわゆる往診）、仮設住宅での医療相談と初めての体験の連続でしたが少しずつ業務をこなせるようになっていきました。

本吉病院はこのように、院長先生を始め医師が全員外部から着任したばかりのまさに新しい病院です。2013年から入院病棟も再開され、現在は16床ほどで、４月から電子カルテも導入されたばかりです。外来に加え、訪問診療として在宅の患者さんのところに医師と看護師も赴きます。訪問診療の患者さんは震災後ニーズが高まり始まったそうで、計100人を優に超えて現在も増加中です。県外から支援に定期的に来られる先生方も多く、さらに研修医の先生が地域医療研修で訪れ、医学生さんや看護学生さんも実習でたくさん来られ、常に研修医の先生か学生さんがいるような状態です。つまり、あらゆることが新しく始まり、変化し続けており、常に医療スタッフも外部の方がいるというユニークな病院なのです。このような環境は、もともと医療以外の分野で働き、さらに通常の医療人にはあるまじき経歴をもつ自分にとっては、むしろ合っているのかもしれません。

前述したように本吉病院には、「東北メディカル・メガバンク機構」から３か月間の交代で支援医師がこられています。被災地の病院にとって医師の確保が困

子供のためのサッカー場整備にて、ボランティアの方々と。２列目右端が私、左端が代表の藤田さん。

難な中、医師を一定期間派遣してくれるという支援は最も有難い支援といえます。東北メディカル・メガバンク機構は、東北大学が創出した仕組みで、東日本大震災後、未来型医療を築いて震災復興に取り組むことを目的に設置されました。具体的には、気仙沼市、南三陸町、女川町、石巻市などの複数の宮城県内の医療機関に支援医師の派遣を行うこと、大規模な研究調査（具体的には地域住民コホート調査で、体質（ゲノム情報）と生活習慣・環境の組み合わせが健康状態にどのように影響するかを調べ、バイオバンクに情報を集積し、一人一人の体質にあった予防法・治療法を開発し、地域の保健医療の向上につなげるというもの）などを行っています。

この東北メディカル・メガバンク機構では、なんと香川大学の出身で東北大学に赴任されている清元秀泰教授が、地域医療支援部門の部門長として尽力されていたのでした。このような香川から遠く離れた東北の被災地で、香川大学在学中に講義を受けたり、ポリクリで指導していただいた母校の先輩に再会することは、本当に思いもかけないことで、何か運命的なものを感じずにはいられません。

本吉病院での復帰は始まったばかりで、自身の知識と経験の無さと非力さを痛感する日々の繰り返しです。ですが、ほんの少しずつでも進歩して、患者さんにより良い医療サービスを提供するようにと研修をする毎日です。

もしこのような被災地の実状を知りたい・見たいと、ご希望の先生方や学生さんがいらっしゃれば遠慮なく本吉病院までご連絡ください。私は、こんなに医師や医学生がこの本吉病院に集まる最大の理由は、医療スタッフや地域の住民の皆さんから、医師に対する敬意と親しみ、感謝の気持ちをいつも感じるからだと思っています。

「女性医師特集」

内閣府 参事官（ライフイノベーション担当）
北窓　隆子（昭和61年卒）

しず井上内科
井上佐知子（平成元年卒）

香川大学健康管理センター
永尾　　幸（平成８年卒）

香川大学医学部附属病院
泌尿器・副腎・腎移植外科
平間　裕美（平成15年卒）

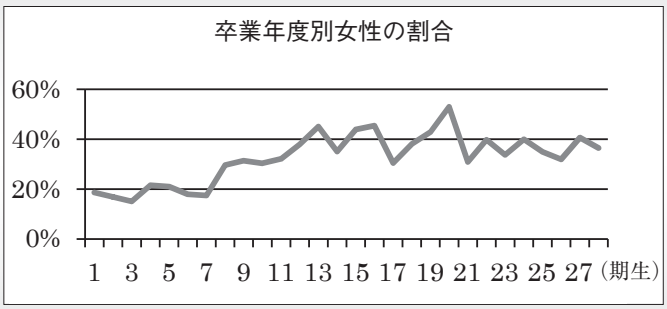
香川大学医学部附属病院小児科
鈴木　裕美（平成22年卒）

香川大学医学部（旧香川医科大学）卒業生は昭和61年を第一期とし、平成25年３月卒業生で28期となりました。総卒業者数は2651名に及び、そのうち女性は860名です。

初期は学年で２割に満たなかった女性の割合が、年代が進むに従って増え、近年は４割前後を継続しています。

女性医師の活躍は、仕事、家庭、多種多様なネットワークを足場として多岐にわたり、パワフルさと柔軟さのバランス感覚は女性ならではと言えそうです。

今回、同窓の女性医師から近況報告をいただいています。



卒業年度別卒業者数

卒年	61	62	63	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	計
期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
男	61	74	79	80	79	87	90	69	59	62	74	54	50	63	55	42	80	57	56	47	56	56	59	54	67	66	54	61	1791
女	14	15	14	22	21	19	19	29	27	27	35	33	41	34	43	35	35	35	42	53	25	37	30	36	36	31	37	35	860
総数	75	89	93	102	100	106	109	98	86	89	109	87	91	97	98	77	115	92	98	100	81	93	89	90	103	97	91	96	2651
女性率	19%	17%	15%	22%	21%	18%	17%	30%	31%	30%	32%	38%	45%	35%	44%	45%	30%	38%	43%	53%	31%	40%	34%	40%	35%	32%	41%	36%	32%

一期一会

内閣府　参事官（ライフイノベーション担当）
北窓　隆子（昭和61年卒）

私は、一期生として香川医科大学を昭和61年（1986年）に卒業しました。早いもので27年が過ぎました。卒業式の日に砂田学長がおっしゃった「君たち一人を医師にするために、2000万円の血税が使われている。したがって、その金額に該当する貢献をしたと確信できるまでは、どんなことがあっても仕事を辞めてはいけない。」というお話しは心に深く刻んでいます。ここ数年は、何故かあと300万円ほど借金として残っているような気がしてならない。

私は、卒業直後、ローテート研修を受けたいと考えて長崎の国立病院で臨床研修を受けました。その後、当時の厚生省（当時）に入省し、以降、大学や研究所で仕事をしたこともありますが、基本的には行政の仕事をして今日に至っています。現在の厚生労働省には、私のように医師免許を有する職員が250名程度所属し、厚生労働省をはじめ環境省、文部科学省、防衛省などの中央官庁はもとより都道府県庁、検疫所、ナショナルセンターをはじめとする独立行政法人で仕事をしています。

私は、昨年の８月から内閣府で仕事をしていますが、入省してから14番目の仕事であり、計算の上では平均２年で職場を異動していることになります。この間、がん対策、難病対策、職業病対策、労働衛生、医療指導監査、環境リスク評価、旧軍毒ガス問題、アスベスト健康被害、新薬審査、先端医療開発振興など得難い経験をすることができました。また、香川県、宮崎県、青森県の３県で地方自治体における保健衛生や福祉の仕事をする機会を得ました。縁あって母校の医学部でも２年にわたり教員を勤め、300人の教え子を得ることもできたことは望外の幸せです。

現在所属している内閣府は、平成13年１月の中央省庁等改革における内閣機能強化の一環として設置され、内閣の重要政策に関する内閣の事務を助けることを任務とし、内閣として恒常的に関与すべき特定（経済財政、科学技術、防災、男女共同参画、沖縄及び北方対策等）の分野における企画立案・総合調整を担当しています。私は、このうち科学技術を担当する部局に所属し、科学技術政策担当の特命担当大臣を補佐するとともに総合科学技術会議の事務局としての業務に従事しています。

総合科学技術会議は、内閣総理大臣を議長として14人の議員をもって構成することとしています。内閣総理大臣、科学技術政策担当大臣のリーダーシップの下、科学技術政策の推進のための司令塔として、我が国全体の科学技術を俯瞰し、総合的かつ基本的な政策の企画立案及び総合調整を行っています。科学技術の振興は未来への投資であり、天然資源に乏しい我が国が少子高齢社会の中で未来を切り拓いていくためには、科学技術イノベーション政策の推進が欠かせません。そこで、総合科学技術会議では、科学技術に関する予算等の資源配分方針の決定を行い、科学技術予算の重点化・効率化を行うとともに最先端研究開発支援プログラムを創設し、世界のトップを目指す30の最先端研究課題・中心研究者を選んで研究資金の基金化による研究支援を行ってきました。

昨年度は京都大学の山中教授のノーベル賞受賞という嬉しいニュースもあり、科学技術にスポットライトがあたりました。一方で国立大学法人や独立行政法人の運営費交付金の毎年の減額、論文生産において低下する日本のポジション及びシンガポールや韓国等のライフサイエンスを国家戦略として位置付けた動き等を見渡すと科学技術イノベーションにおける日本の位置は楽観できるものではありません。関係省庁がバラバラに研究開発を支援するのではなく、関係省庁が一体となって産業界とも連携し、例えば再生医療の研究開発の実用化、事業化、産業化を支援しなければ、国際競争を制することはできません。

そこで内閣府総合科学技術会議では、現内閣の成長戦略に科学技術の面から貢献し、あるべき社会の姿を実現するために、科学技術イノベーション総合戦略を策定し、６月７日に閣議決定しました。

「科学技術イノベーション総合戦略～新次元日本創造への挑戦～」についてHP http://www8.cao.go.jp/cstp/sogosenryaku/index.html で公表していますので、是非ご覧になってください。

2030年の我が国のあるべき姿の実現を図るとともに、経済再生を強力に推進するために、「クリーンで経済的なエネルギーシステムの実現」「国際社会の先駆けとなる健康長寿社会の実現」「世界に先駆けた次世代インフラの整備」「地域資源を強みとした地域の再生」「東日本大震災からの早期の復興再生」の５つの課題について重点的に取り組むこととしています。

職員旅行を終えて

医療法人桃蘭会　しづ井上内科
井上　佐知子（平成元年卒）

ふと気が付くと、高松上空を過ぎて宇和島上空付近にさしかかっておりました。離陸前後はなぜか毎回睡魔に襲われ、眠ってしまいます。時刻は、平成25年７月13日午後１時過ぎ。数日前にウエザーニユーズから、台風７号発生のお知らせメールが届いてから、「今回は無理かもしれない」というこれまでにない気弱な空気に包まれていましたが、なんとか無事に４時間遅れで出発することができました。

平成８年５月30日、滋賀県草津市のやや山手（と言うと聞こえはいいものの、単なる田舎）の志津小学校前に「しづ井上内科」という小さな診療所を開設し、早いもので17年が経ちました。開院前に何度か行ったハワイのハレクラニホテルに憧れて、いつの日か、診療所のみんなでハレクラニホテルに行けるよう頑張ろうと思い、ホテルの蘭の花のロゴを無断で拝借して、密かに使わせてもらっています。しかし現実は、なかなかそんな夢が叶うことはなく、自分たちで行く旅行もせいぜい２泊３日の短期間となり、近場の香港や台湾ばかりとなっていました。必然的にそうなったのですが、その香港や台湾の方がかえって良くなって、今となってはハワイは縁遠いものとなりました。

お陰様で診療所は、周辺の病院の先生方や多くの方に助けてもらいながら、何とか順調に診療を続けさせて頂いております。数年前より、職員旅行にも行くことができるようになりました。２回の香港を経て、より近い台湾旅行になり、今回で６回目になります。台湾は食べ物も美味しく、日本語環境も良く、親日的でとてもいい所です。治安が良く、安価で贅沢な旅が出来ることからも、職員旅行には最適だと思っています。

台風７号ソーリックにはハラハラドキドキさせられましたが、飛行機を飛ばしてくれた日航のお陰で、今回も旅行を楽しんでこれると期待しています。

と、ここまで書いた後、あっという間に２泊３日の旅行は終わってしまい、またいつもの生活に戻っています。ひたすら食べて、揉まれて（各種マッサージ）、いっぱいお買い物をして、と相変わらずの３日間でした。２日目の高雄観光で少し雨が降りましたが、心配していた台風の影響はほとんどなく、奇跡的に予定をすべてこなして、皆で元気に帰って参りました。

開業するにあたっては、土地や建物などハード部分はもちろんのこと、ソフト部分の職員の確保もなかなか大変なことです。ところがラッキーな事に、当院では開院以来、職員の募集を一度もしたことがありません。これまでのところ何かあっても、その都度神の助けのような人が現れたり、相手の都合で退職となったりで、大きな問題にならずにすんでいます。また、職員の間にも大したもめ事もなく、皆で仲良く働いてくれているようです。

開業すると、診療以外の雑務が多く、それに労力をとられてストレスが増えていきます。人間関係の問題は努力をすれば解決できるというものではないので、今のこの職場環境は幸運以外のなにものでもない、と喜んでいます。

そんなメンバーとの旅行は毎回楽しく、企画し甲斐があります。（実は、旅行の企画や手配は、自称「天職はツアーコンダクター」の主人が全てしてくれています。既に、次回の旅行の構想も出来つつあるみたいです。）

来年も、また楽しく職員旅行に行けるよう、日々真面目に診療を続けていきたい、そう思っております。

「巡り巡って・・・」

香川大学　保健管理センター
永尾　　幸（平成８年卒）

11期生（平成８年卒業）の永尾と申します。昨年度末で定年退官された久郷敏明先生の後任として、本年４月１日より香川大学保健管理センター医学部分室に勤務しております。まさかこのような形で同窓会会報に文章を書くことになるとは思いも寄らず、私事で恐縮ですが少し毛色の違う方向（漢方）に進んだこともあり、その紹介（？）も兼ねて近況報告をさせていただきます。

卒業後は第一内科（現内分泌代謝・血液・免疫・呼吸器内科）に入局して研修を始め、関連病院に勤務ののち５年目に医員として本学附属病院に戻りましたが、途中で体調を崩しやむなく休職。いったん臨床からは距離を置き、平成13年秋より研究生活に入りました。

研究生時代は、実験に関することなども含め飲み込みが遅く、指導してくださった先生方には多大なるご迷惑をおかけしましたが、何とか修了することができました。臨床に戻った後、オーダーする検査についてや論文を読む際に、研究生時代に学んだ知識が具体的な理解の助けになることを少なからず経験し、研究する機会を持てたことに感謝しています。

研究修了後、平成19年秋からは東京女子医科大学東洋医学研究所に所属し、日本漢方の臨床研修を受けました。

漢方医学を勉強しようと思ったのは、自分が子宮筋腫で治療を受けていた時期にたまたまセミナーに参加して、試しに漢方薬を服用してみたことがきっかけです。さすがに筋腫が小さくなることはなかったですが、服用しているうちに全般的な体調が落ち着き、効果を体感したことと、「心身一如」「心身全体の調和を図る」という漢方の考え方に興味を持ち、いくつか研修施設を見学した上で東京女子医科大学に決めました。

入った当初、サテライトである東洋医学研究所は東京都庁そばの巨大なオフィスビル内にあり、周りはまさしく“コンクリートジャングル”といった印象で、それまで四国から出て生活したことのなかった田舎者の私は（とんでもないところに来たなぁ・・・）とかなり圧倒されましたが、３ヵ月後に山手線内で最も北にある田端駅近くへ移転して下町の雰囲気が漂う環境になったので、ずいぶん気が楽になりました（笑）。

漢方医学の面白さと難しさは表裏一体で、いくつかその特徴を挙げますと

・同じ症状でも同じ漢方薬が効くとは限らない（異なる患者ではもちろん、同じ患者でも時期や加齢により効く薬が変わることがあり得る）

・季節や天候と症状の関連性に注目する（例えば低気圧と頭痛）

・主訴ではなく副訴の治療により主訴も改善する場合がある（例えば便秘が改善したら喘息発作が軽減）

といったことがあります。

西洋医学でも同じかもしれませんが、漢方医学では病態のポイントをどう掴むかという医師個人のセンスが、よりダイレクトに治療効果に反映されるように感じます。平成23年春に専門医を取得しましたが、今でも“専門”と口にするのはおこがましく、やっと入門の扉をくぐって中に入ったという感じが正直なところです。

経験を積んだのち、ゆくゆくは香川へ帰郷する方向で考えていた時にご縁があり、今年の４月から母校の保健管理センターに勤務することになりました。産業医という少し畑違いの分野ではありますが、本来漢方医学は薬のことだけを指すのではなく、日常生活における健康管理（＝養生）も含んでおり、これまでの経験を活かせればと思っています。

この原稿を書いている時点では着任後３ヶ月を過ぎたところで、まだ分からないことも多く右往左往の毎日ですが、同期生はもちろん、まわりの諸先生方に大変お世話になり感謝しています。母校で仕事ができるありがたみを感じています。

また保健室のような役割も担っているので学生の素顔が垣間見られる部分もあり、彼らの姿に自分の学生時代が投影され、何だかタイムスリップしたような気持ちになることもあります。当時は深く考えることもなく毎日を過ごしていましたが、年齢・経歴・出身地もいろんな人がいて、面白い環境だったんだなぁと改めて思いました。

昨年１月、卒後16年目にして初めての同期会が開かれ、40名近い同級生と久しぶりに顔を合わせましたが、近況報告を聞いていると順当に仕事を続けている人もいれば、意外な方向へ進んでいる人もいて、皆それぞれの場所で頑張っている姿にとても励まされました。振り返ってみると私も紆余曲折の道のりで、卒業した頃には思ってもみなかった形で巡り巡って大学に戻ることになり、自分自身が一番驚いていますが、周りの方々にご指導いただきながら精一杯やっていこうと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

『医師として母として』

泌尿器・副腎・腎移植外科
平間　裕美（平成15年卒）

私は平成15年医学科卒の平間と申します。医師として働き始めて11年目になります。今回、女性医師の特集ということで原稿の依頼をいただきました。仕事と育児に追われる毎日のなかで、なかなか女性医師としての自分を見つめなおす時間はありませんでしたが、折角いただいたチャンスですので、振り返ってみたいと思います。

私は泌尿器科医ということで、「なぜ泌尿器科を選んだのか？」という質問を数えきれないほど受けました。今でこそ都会における女性泌尿器科医師は増えてきておりますが、私が入局した10年前は、特に地方では女性泌尿器科医師がおらず、ちょっと変わった人と映っていたかもしれません。元々は産婦人科を入局候補に挙げておりました。なぜなら、男性医師による診察を恥ずかしいと思っている女性患者さんもいるのではないかという思いが根本にあったからです。しかし４年生の泌尿器科ポリクリ実習で、泌尿器科を受診する女性患者さんが多いことに驚き、さらに膀胱鏡などの下半身を出す（適切な表現でなくてすみません）検査や手術を目の当たりにしたときには言葉も出ませんでした。そのような経験から、泌尿器科にこそ女性医師が必要なのではないかと考えるようになり、最終的には当時の香川県に女性泌尿器科医師がいなかったことが泌尿器科入局の決め手となりました。

研修医のころはよく看護師と間違えられました。ごくごくたまに男性患者さんからセクハラのような発言や行動をされることもありましたが、医局員の先生方に愚痴を聞いていただき潰されることなく今に至っております。一方で、女性患者さんからは「女の先生で良かった。」「先生がするなら膀胱鏡検査を受けます。」など嬉しいお言葉をいただくことも多く、私のエネルギー源になっています。最近では、香川大学にも女性の入局者が増えてきており大変嬉しく思っています。

どちらかというと男勝りな私は、同期の加藤君、佐倉君、林田君と対等に頑張ってきたつもりです（訂正があればご指摘ください）。きっと私は仕事に生涯を捧げるのだろうな～と漠然と思っておりましたが、そんな私にも縁あって結婚することになり子供にも恵まれました。妊娠７か月後半、開腹手術に入った次の日の妊婦健診で切迫早産と診断され、２か月以上入院することになりました。出産後は、子供と24時間二人っきりの生活が耐えられなくなり子供が３か月になる前に仕事復帰をさせていただきましたが、子供の急な病気等で周りにご迷惑をおかけしてきました。妊娠から現在まで予定通りに事が進まないことも多く、日々葛藤しながら、それでも私がなんとか仕事を続けられているのは、筧教授をはじめ医局員のスタッフの皆様のお蔭だと感謝の気持ちでいっぱいです。この場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

女性医師が母になると両親や夫の全面的な協力が得られない限りは、医師としてのスキルアップという面でどうしても遅れると思います。しかし、それを嘆くとドツボにはまってしまうような気がして、私は割り切って仕事をするように考えをシフトチェンジしました。男性医師がしている仕事量と専業主婦がしている家事育児を両方こなすことは私には到底不可能なので、「与えられた状況下で精一杯出来ることをする」ということを心がけています。出産によって失ったドライバーの飛距離に対しては少々悔いが残りますが、得られたこともたくさんあります。仕事においては女性特有の悩みも理解できるようになり、女性泌尿器科の専門性にも生かせられています。今は、自分がどのような医師として生きていくのかというビジョンがよくわからなくなっているのですが、それも深く考えないようにしています。その時の状況に応じて自分の考え方を変えなければならないのですから。家庭を大切にし、仕事も周りに迷惑をかけない程度に患者さんに喜んでもらえる医療を提供していきたいと思っています。

この度は、このような機会を与えていただきありがとうございました。これからも、細く長く医師として母として在り続けたいと思います。

Enjoy Your Flight !!

香川大学医学部附属病院　小児科
鈴木　裕美（平成22年卒）

私が結婚したのはアメリカの大学に留学している時で、一人目の子供が生まれた時はちょうど大学院の卒業論文が書き終わったところでした。大学院を卒業してから約10年は夫についてブラジルや中国で暮らしており、徐々に増えていく子供の世話に忙しく、気がつけば専業主婦生活を10年近くしていました。

私が医学部に入ったのはその後ですから、入学当時子供達は上から小学４年生、３年生、年長になっていました。神奈川県から香川県にやってきたので、子供達は方言が分からず、友達の輪に入っていくのが難しかったようでした。長女は自分の殻に閉じこもってしまい、半年間教室に入れず保健室登校をしていました。末っ子もよく保育園に行く橋の上で座り込み、どうしても行きたくないというので医大の授業に連れて行きました。休日は勉強する私の足元に寝転んで「休み時間まだ？」と勉強のきりがつくのをひたすら待ってすごしていました。

私が研修医になったとき、子供達は中学生と小学生になっていました。昔のようにご飯を食べさせ、お風呂にいれ、宿題をみてやり、寝る前には本を読み聞かせたりする必要はなくなりました。反対に洗濯物をとりこんだり、風呂洗いをしたり、炊飯器にご飯をセットするなどの手伝いをしてもらい、自分が助けられることも多くなりました。今は私が後期研修医で子供達も高校生と中学生です。子供が大きくなることで出てくる新たな問題というのは多々あり、子供が小さいほうが楽なのではないかと思うことがあります。

まずは人間関係。女の子は特に友人とうまくやれないと大変です。すぐグループになるし、ちょっとしたことから喧嘩して仲間はずれにしたり、いじめに発展したり。娘も一人で悩んで学校を休み、家族とも口をきかず孤立していた時期があり、「私は家でも居場所がない」とツイッターしているのを知ってショックでした。息子も携帯電話を学校のトイレに捨てられたこともあるし、反対に級友をいじめたと罰をうけたこともありました。この時は先生に話を聞いてもらえず不信感だけが残ったようでした。私も息子がいじめたなんて！と怒りが先に立ってろくに話も聞いてやらず、彼も自分から話そうとはしませんでした。後になって、本当は違うんでしょう、話してごらんと言うとやっと話し始めたのでした。先入観や決め付けがあるうちは、子供は心を開かないのだと実感した一件でした。

他の問題では勉強があります。中学生になると急に順位がついて、出来不出来がはっきりします。自分の子供には出来がいいことを期待するでしょうし、もし出来が悪ければ落胆するし叱ることもあるでしょう。努力できるのも才能で、それを勉強に向けられる人はそんなに多くない。まあ、元気に学校に行き、楽しそうにしている、何か夢中になれるものがあるようならそれで十分ではないかとの結論に最近達しました。

自分も仕事で疲れると家に帰ってまで勉強する気には到底なれませんし、できる同期をみて奮起する気力ももてません。自分だって「できない自分」と日々格闘しており、指導してくださる先生には、１ヶ月前のあなたより今のほうができるようになったことも増えたし、任せられることも増えたよと言われ、救われる思いがしています。比べるのは他人ではなく、過去の自分。１ヶ月前の自分、１年前の自分より知っていること、できることは増えているはず。「できないことを数えるよりも、できるようになったことを数えよう」と、自分を日々励ましながら背中を押しています。

研修を通じてたくさんの先生方に私は育てられています。育てられながら、自分の子育てを振り返ることが多々あります。子供達も私と同じように「できない自分」に悩み、「何がしたいのか、できるのか」わからずに途方に暮れているのでしょう。そして、複雑な人間関係の中で自分の居場所を確保するのに心を砕き、膨大なストレスを抱えながら、ささやかな楽しみをみつけて、その中に逃避しています。そんな子供達になんと声をかけてやったらいいのでしょうか。

私が学生時代、私のことをいつも気にかけてくださる先生がいました。その先生が私を見かける度にこう声をかけてくださいました。「低空飛行でええからな。」それで私は心が軽くなり、低空飛行ながら飛び続けることができたのだと思います。

人生は長く、変化に富んでおり、とてもダイナミックです。高く高く飛ぶことも、低空飛行することも、給油するため立ち止まることもあります。飛行機が故障することもあるでしょう。それでも常に大事なことは一つです。

Enjoy your flight !!

国外留学助成金留学レポート

ネブラスカ大学メディカルセンター留学記

香川大学医学部腫瘍病理学　横平　政直（平成11年卒）

ネブラスカ大学メディカルセンター内の研究施設

2009年５月から１年間、アメリカ合衆国ネブラスカ州オマハ、ネブラスカ大学メディカルセンター、Pathology and Microbiology departmentのDr. Samuel M. Cohenのもとで研究留学させて頂きました。ネブラスカ州オマハは北米のちょうど真ん中に位置します。経度では函館のわずかに南、気候も青森や北海道に似ていますが、内陸部なので寒暖差が大きいです。

僕が留学したいと思ったのは、初めての国際学会（アメリカ、ニューオリンズ）の時でした。それは今から約８年前になりますが、ポスター発表では極度の緊張に襲われました。初めて多数のアメリカ人や外国籍の研究者と英語で会話しなければなりません。それまで医局に在籍していた中国人大学院生のお陰で、英会話自体に関しては稚拙ながらもそれほど恐れはありませんでした。つまり、英会話よりも「ガイジン」が怖かったのです。文化も違い、考えていることが分からず、得体の知れない未知に対する恐怖です。そんな恐怖症で、初国際学会でのポスター発表はボロボロ。「Hi ！」の挨拶の後は、相手の話す内容が全く聞き取れず、こちらからは単語の羅列のみ発声する状態でした。その一方で、この学会では未知の中にも理解・共感できる部分を感じ、研究面を含めてもっとこの国を知りたいと思うようになったのでした。ボロボロの初国際学会によって、僕のアメリカ研究留学生活への願望はしっかりしたものになりました。研究活動は順調な時もあれば、うまくいかない時があります。思うような結果が出ず、閉塞感を感じる時には、もしかしたら大国アメリカにはもっと画期的な「何か」があるかも、と期待してしまいます。このことも、僕の留学したい病に拍車をかけました。

そんな「ガイジン」恐怖症の自分が留学先をどう選ぶか。自分の研究フィールドの一つである「発癌病理」分野には国内にも100名強の研究者がいて、毎年の研究会で多施設の研究者と顔を合わせます。このつながりのお陰で、推薦してもらったのが、Dr. Samuel M. Cohenです。これまでに、このラボに留学した先輩もたくさんおり、ボスとラボの雰囲気の良さはお墨付きです。「○○の研究がしたいから、その権威である○○先生のところで留学したい」というのが優等生の動機のように感じますが、自分の場合の「なんでもいいから経験できるものは全部経験してこよう」というのはこのような観点からかけ離れていたと思います。

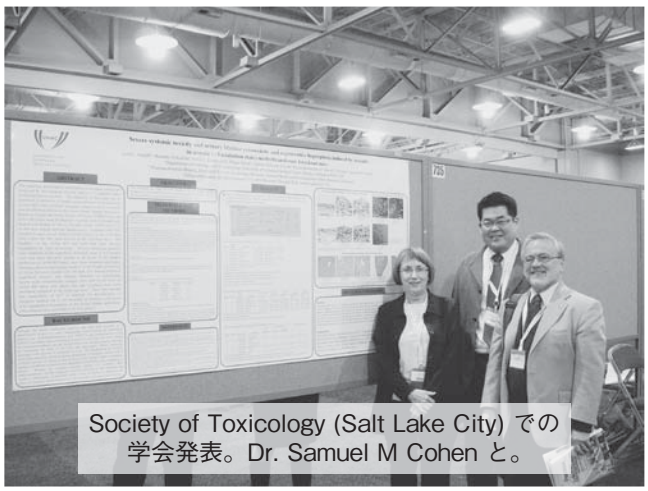
渡米後、日本での噂通り、ボスのDr. Cohenからは、研究のみならず生活面においても、とても手厚いサポートを受けました。渡米直後には住居が無いので、とりあえず我が一家はDr. Cohenの家に居候です。彼は「Welcome to Hotel COHEN !!」と、そこまで親しくもない我が日本人一家に対して、自宅に大歓迎です。渡米翌日、もちろん時差ボケで眠れませんでしたが、ボスに連れられて早朝に大学へ出動。完璧に統率のとれたラボメンバーたちのサポートにより、たった１日で大学の手続き、社会保障番号の取得、銀行口座の開設、アパートの契約のすべてを済ませました（アパートへは翌日の渡米２日後に入居）。最初の手続き

があっという間に終了したのはよいのですが、翌日（渡米２日後）にはラボで実働要員としてフル勤務です（もちろん時差ボケ解消せず）。ラボのメンバーの多大なる協力は、すぐに仕事上の戦力になって欲しいということだったのだと気付きました。

ラボからの手厚いサポートと、自分のアメリカ留学への強い希望があっても、最初の１ヶ月は思い通りに物事がすすまないことだらけの日々に、なかなか解消されない時差ボケが重なり、体力的にも精神的にも疲弊してしまいました。まさに、日本とアメリカとの文化の違いに苦しんでいて、これがカルチャーショックと呼ばれるものでした。順調に行かない手続きに苦労を重ね、緊張する実技運転試験を経て、やっと自動車運転免許がとれたのが、渡米１ヶ月目でした。このころから、日々がどんどん楽しく明るくなっていきました。

Dr. Cohenは毒性病理学分野の権威であり、特に地域によって水道水等に含まれるヒ素の膀胱発癌研究についての専門家です。よって自分の留学研究内容は、膀胱毒性および膀胱発癌が中心です。膀胱はこれまでに扱ったことのない臓器でしたが、毒性学や発がんは共通するフィールドであり、一時的に本研究に集中して取り組むことは帰国後の研究にも良い影響があるはずと思っていました。すでにラボで予定されていた自分の研究テーマに対して、迅速かつ確実に遂行し、論文発表を行うことが当面の僕の使命となりました。敢えて具体的な研究テーマを持たずにアメリカに来た僕でしたが、１年が経ってみると、自分のカラーを取り入れた研究も行い、たくさんの成果を得ることが出来ました。ラボは新築でとても綺麗でしたが、素晴らしい機器類が潤沢に使えたわけではありません。むしろ、日本での医局の研究室の方が機器は多い上に、いつでも自由に使える点で圧勝しており、渡米前の僕の「アメリカには何かある」妄想はかなり解消されました。

しかし、「アメリカには何かある」妄想のうち、実際にもそうであると感じた点が１点あります。研究者の能力の素晴らしさです。僕がいたラボ以外にもたくさんのラボが存在し、時々、様々なラボに力頼みに訪問します。そこで出会う研究者の奥深さとノウハウは驚くべきものでした（もちろんそうでない人も多くいますが）。さらには我がラボのボスの凄さです。ボスのDr. Cohenとの論文原稿のやりとりは大きな感銘を受けました。驚愕だったのは、Dr. Cohenのdiscussion作成方法です。彼は狭い自室の中を行ったり来たりしながら、小さなメモ紙を片手に、録音機のマイクに向かって語りかけるのです。物語を語るように自分の読みあげたdiscussionを録音します。一通りdiscussionを「話し」終えた後で秘書がそれをパソコンでテキストに起こします。最後に必要なreferenceを要所要所に付していくのです。このように僕が書いたdiscussionは量的にも３倍くらいの圧倒的な論述文になり、その内容の奥の深さにはいつも感嘆していました。


Society of Toxicology (Salt Lake City) での学会発表。Dr. Samuel M Cohen と。

結局、滞在中はとても多忙だった研究漬けの日々で、アメリカ旅行はほとんど行くことはできませんでした。その分、空いた時間は大切で、とにかくアメリカを満喫しようと努めました。少しでも時間が出来たら、しばしば子供を公園に連れて行きました。子供は躊躇なく現地の子供達と仲良くなります。その子供たちを連れてきている親同士ですぐに会話が始まるのもアメリカならではなのです。おっさんの自分を不審者扱いもされず、奥様やおばあちゃま方と世間話する、こんなに簡単に公園デビューができるのかと感動的です（日本では未だにとても苦手ですが）。日本人の少ない地域にもかかわらず、我が一家はどっぷりとアメリカ文化に漬かり、一通りの祝祭日イベントを体験しました。ハロウィンも貧乏でコスチュームが買えず（という想定で）、自ら古新聞で作った落ち武者風鎧を身にまとって、Trick or Treat に子ども集団とともに参加です（さすがにお菓子はもらえませんが）。ボスの孫（当時５歳）から、僕の渾身作の衣装に対して、「Baaaad Costuuuume !!!（日本語訳:ばゃぁっーーーど、こすっちゅーぅーーむぁー！）」と何度も激しく罵られた時には、「おまえのスターウォーズと交換してやろうか」と本気で思いました。冬はほぼ連日、オールシーズンタイヤで圧雪路を滑りながら走る通勤でした。よって雪道はほぼ慣れていたのですが、クリスマスイヴは短時間に約50cmの積雪という大雪となりました。クリスマスパーティに出かけた時にはふかふかの雪に突っ込み、まさかのスタックを経験しました。さらに、年末カウントダウンでは日本では考えられない馬鹿騒ぎに参加し、Easter では子供以上にegg hunt に夢中になりました。こんなに充実した生活を送れたのも、ボスのファミリーやアパートの近隣住民のお陰です。

留学から帰国して３年が経ち、その間に国際学会でアメリカに２回訪問しましたが、留学前とは大きく心

境が違います。実は英会話能力はそれほど大きく進歩していないと思うのですが、相手の文化的背景や風習への理解が深まったことで、会話もそれなりに流暢になっているのではないかと感じます。そして、本学内でも海外から来る留学生たちに対して、より気の利いた親身なサポートができるようになっていると思います。研究活動では留学前より、もっと当教室内での研究に集中できるようになっていると感じます。論文のdiscussion作成時にはいつも、「Dr. Cohenだったら、どのように論述展開していくかな」と想像しながら書いており、これは大きな留学成果だったと自負しています。そして、研究活動に大事な「人とのつながり」がグンと拡がりました。

このように、人生における大きな財産を手に入れることができ、教室の教授をはじめ、留学中の自分の不在の穴を埋めてくれた先生方、援助を頂いた讃樹會、たくさんの人に多大な感謝を感じています。医師は望めば留学することができ、帰国後にも帰ることができる場があります。留学中も医師という肩書きのお陰で、ある程度アメリカ社会でも尊重してもらえます。金銭的には苦しいかもしれませんが、期間限定と考えればなんとかなります(讃樹會の助成金も重要です)。せっかく医師になったのだから、人生の大きな財産となる留学を経験しないのはもったいない、と思うのです。

ハロウィンでの出発前集合写真

学生の短期留学報告

２月　ブルネイ・ダルサラーム大学（２名）
４月　グラスゴー大学（４名）、ニューキャッスル大学（２名）

ブルネイ・ダルサラーム大学

2013年２月８日～３月12日

４年　水井　亮

①学習

平日は午前８時から午後４時頃まで研究室にて研究作業をしました。

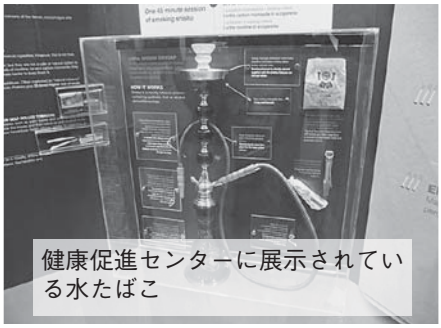
私の研究テーマは「乳癌原因遺伝子BRCAの変異の観察」でした。私に課せられた課題の工程は大きく分けて３つありました。１つ目は血液サンプルからDNAの取り出し、２つ目は取り出したDNAをPCR法によって増幅、３つ目は１、２、の工程が問題なく完了したかどうかを電気泳動によって確認するというものでした。

時間の関係で変異の観察はできなかったのですが、電気泳動やPCR法などの研究活動における基本的な手技を習得することができました。また研究作業以外にも糖尿病についてのフィールドワークを行い、糖尿病のリスクと食生活の関連性の指摘を試みました。滞在中の３食、間食を全て写真に収めたり、現地の知人に聞き取り調査をしたりして、大まかな摂取カロリーや献立の傾向について考察しました。また、公衆衛生の博士課程の学生達と仲良くなる機会があり、彼等も糖尿病の対策法について学習していたことから一緒に講義に参加させてもらったり、彼等と共にRIPAS病 院、Health Promotion center, Ministry of Educationなど様々な施設を訪問してそこの職員と対談したりする事ができました。それらの結果、ブルネイ人の傾向として（１）野菜の摂取量が極端に少ない（２）車の普及率が高すぎて運動量が少ない（３）習慣的に間食が多い　などといった傾向が見られました。（１）に関して、小学校で給食制度がないため食事のバランスに関する教育が不十分である。また、ブルネイでは野菜や果物がほとんど国産されておらず、大半が輸入品であるため高額であることなどが原因として考えられました。

チューターと私。お互い寝不足で戦った戦友

（２）に関しては、鉄道がない、バスが少ないなど、公共交通機関が発達していない上に、街の構造も車がなくては生活がかなり制限されるようになっているためだと考えました。肥満度の高い国民用のダイエットプログラム、週に一回のエクササイズ講習などの対策が設けられており、国民もこの問題に関して意欲的でした。（３）に関して、ブルネイでは食べること自体がとても良いこととされており、もてなしの１つとしてお菓子と甘い飲み物が出されて、それを食べることが礼儀であるため、間食が増えるようでした。外気温が30度と高い割に飲み物は常温か暖かいものが多く、冷たい飲み物はあまり好まれないようでした。

同時期に留学の江島徳子さん



健康促進センターに展示されている水たばこ

②生活

ブルネイダルサラーム大学の寮で生活していました。食堂は17時に閉店するため、あらかじめ買い込んでいた物を食べるか友人の車で外食する事が大半でした。週末には友人が様々な観光を企画してくれ、ブルネイ人以外の友人も多くできました。寮は築２年と新しく、設備も整って

７つ星といわれるエンパイアホテル

おり快適な生活を送ることができました。

③後輩へ

英語力に関して、こちらから伝える分には身振り手振りでどうにかなるものの、相手から受け取る分には十分なリスニング能力と単語力が最低限必要かと思います。

また、日本の携帯にSIMロックがかかっている関係で携帯電話がwifi回線しか使えないので、何らかの対策をするべきかと思います。(SIMフリーの機体を学校用に購入するなど)。

④その他

勉学、人間関係、文化的な価値観、などのあらゆる面においてとても良い経験になりました。ありがとうございました。

University of Glasgow

2013年４月１日～４月27日

６年　**内藤　覚**

平成25年４月１日～４月27日までの４週間の期間にわたり、University of Glasgow の 関連病院であるRoyal Hospital for Sick Children（York hill） において、小児科の実習を行った。病床数266床、年間外来患者数90000人規模の病院で、小児にかかわるすべての疾患を診る同病院は、University of Glasgowの生徒の臨床実習も同時に行われている施設であった。

実習の基本的なスケジュールは以下のとおりである。※

月曜日はSupervisorであるProf. Robert Carachiの協力のもと手術見学をさせていただいた。この病院では各外科医ごとに専門が分かれており幅広い手術が行われていた。また、学生は興味があり手術を見学してみたい場合は基本的に医師の許可があれば手術室に入室できる環境が整っていた。心臓外科や消化器外科などでの大掛かりな手術から、巻き爪をはがすなどの日帰り手術など多くの症例を見学させてもらい、課題実習の日も含め週２～３回手術室に入り手術助手をさせてもらうことができた。

Prof. Robert Carachiと

水曜日はUniversity of Glasgow の学生とともに授業に参加した。授業内容としては発生、生理などの基礎から臨床に基づいた授業まで行われていた。また、ケーススタディも多く、学生は各々感じたことや質問などを挙手するでもなく発言し、先生もそれに反応することで授業が進んで行き、生徒と教師との距離の近さを感じる内容であった。

縫合実習時の写真

また、昼休みには興味がある生徒を中心にしたLunchtime Anatomy session や、縫合などの手技の実習があり、多くの生徒が積極的に参加していた。

火・木・金曜日は基本的に自由であり、Supervisorの先生や秘書の方、各科の医師に交渉することで多くの施設を見学することができた。入院病棟での回診や外来での問診、検査などに積極的に参加させていただくことができ、交渉するのは大変であったが有意義な時間を過ごすことができた。Royal Hospital for Sick Children（York hill）は全体の活動

※

月	火	水	木	金
手術見学	課題実習	授業	課題実習	課題実習

を通して、生徒の自主性を重んじ積極的に行動すれば多くのことが得られる環境にあると感じた。

生活状況に関してであるが、まず、イギリスは物価が高く食費に関しては少し考えさせられた。しかし、文化的には成熟しており、博物館、美術館の入場料が無料であり寄付金でまかなわれていて、休日は多くの学生や子供たちでにぎわっていた。宿舎は学生寮でFlatと呼ばれるキッチン（場所によっては風呂・トイレも）共同の施設に３～５人で生活した。私の入った宿舎ではナイジェリア、オーストラリアから来た医学生や、南アフリカから測量の授業をしに来た先生などがステイしており、みんな短期での入寮のため短い期間で顔ぶれが入れ替わっていた。同じFlatに住むフラットメイト同士ではキッチンで会話することが多くコミュニケーションをとる機会が多かった。

『英語を英語で理解できるレベルにないと授業についてくのが難しい』と水曜日の授業でのメモに自分で書いていたのを後に発見したのだが、英単語の意味を理解して日本語に直せるレベルで留学していては授業や現場ではなかなか大変だと感じての言葉だったと感じる。英語を聞いたまま理解し、英語でメモし、それを英語で処理するレベルまでできたら授業などで苦労しなかったように思う（実際に留学の後半での授業メモは英語で書いたものに少しずつ変わっており適応しようとしていた）。これからイギリス留学を考えている後輩に対してはその点についてアドバイスできたらと考えている。

最後になるが、授業で近くに座った学生やフラットメイトなどに日本の医学教育や日本の文化について聞かれることが何度もあった。他国に出ることで自国を客観的に見るチャンスを得たことも今回の留学のひとつの大きな成果のように感じる。

「10年後の私」の10年後

『10年後の私』の10年後

香川大学医学部　内分泌代謝・血液・免疫・呼吸器内科
講師　坂東　修二（平成３年卒）

私が平成12年に書いた「10年後の私は・・・」を今読み返してみると、その当時の私（33歳）は自分個人の成長というテーマが意識の中心にあった。ではその後の10年間で私の意識はどのように変化してきたか。先に答えを言えば、個人の成長より後輩や若手の成長を第一に考えるようになったということである。この意識の変化をもたらした最も重要な出来事は37歳の時に呼吸器内科のグループチーフとなったことである。グループと言っても、チーフになった当時は助教の私と大学院生が１人というなんとも寂しい陣容であった。この人員で臨床・教育・研究の全てをこなすことはとうてい困難であり、実にどれもが中途半端な仕事となってしまった。その結果、関係各所から多くのご批判を頂戴することとなり、チーフとして無力感を感じていた。そのようなある日、香川へ講演に来られた信州大学呼吸器内科の久保恵嗣教授から以下の様なアドバイスを頂いたことが思い出深く心に残っている。

久保先生：「これから坂東先生がすべきことは先生を支えてくれる若い人たちを10年かけて育てることです。呼吸器内科はおもしろい分野です。胸部レントゲンだけでも上手く説明すれば学生や研修医たちは大変興味を示します。まずは情熱を持って教育を続けること。情熱があれば自然に若い人がついてきて先生を支えてくれるようになります。」この久保教授の力強いお話しが心に響くと同時に、あらためて教育の重要性に気づかされることとなった。もともと教育が嫌いでなかった私は以後10年間、手を抜かずに真摯に教育に取り組んできたと自負している。特に、５年生と６年生の臨床実習においては胸部レントゲン読影と身体診察法に重点を置き、久保先生の教え通り、呼吸器診療がいかにおもしろいかを日々学生・研修医に伝えることに専念してきた。その後、石井知也先生と金地伸拓先生が助教として一緒に仕事をしてくれることとなったが、この２人とも大変教育熱心であり、学生や研修医から慕われている。

そして10年の月日がたち、思いもかけない出来事があった。平成22年度と平成23年度の香川大学医学部卒業生が私をOutstanding Teacher of the Yearとして表彰してくれたのである。私自身は16年間大学勤務をしているものの、臨床医としても研究者としてもたいした取り柄が無く、教育も頑張ってはいるが評価されるほどのレベルには達していないと認識していた。また大学での存在意義そのものに乏しいとも考えていた。そのように考えていた中、学生たちが表彰してくれたことは、私にとってこの上ない喜びであり、わずかながらでも大学に貢献できているのかなと感じる瞬間であった。不思議なことにこの頃から、卒業生の中で私と一緒に呼吸器内科をやってみたいという学生や研修医が現れるようになった。おかげで現在では私と石井先生、金地先生に加え、医員と大学院生あわせて６名が呼吸器内科のメンバーとして活躍できている。また、他の施設にも若手スタッフを派遣出来るようになった。外来患者数や入院患者数も徐々に増え、論文も少しずつ発表できるようになってきた。10年前に１人で途方に暮れていたことが嘘のように感じられる今日この頃である。「情熱を持って教育につとめれば、自然に仲

呼吸器グループのバーベキューパーティー
（筆者は中央で帽子をかぶっている。撮影者：石井知也先生）

間が増え、診療の幅が広がり、その結果研究の基盤もできる」という考えがこの10年間の中で私の中に少しずつ育ってきたのである。

現在私は内分泌代謝・血液・免疫・呼吸器内科において医局長を務めており、呼吸器グループ以外の診療チームのまとめ役も仰せつかっている。当科は４つも診療・研究チームがある上、個性的な医局員も多く、医局長としての心労がつきることはない。しかし、次の10年も学生・研修医に対して情熱を持って教育し、彼らが我が愛する内分泌代謝・血液・免疫・呼吸器内科に入局したいと思ってくれるような医局作りに微力ながら努力していきたいと考えている。

香川医科大学医師会会報　第12号誌（平成12年12月発行）より転載

遠い目、近い目

香川医科大学第一内科　板東　修二

この特集のテーマである「10年後の私は…」を考える前に、少し「10年前の私は…」を振り返ってみたいと思います。思い起こせば10年前の私は毎日朝から晩までベッドサイドで診断方法や検査手技の習得に明け暮れる研修医時代を過ごしていました。当時は広島県のある研修病院に勤めていましたが、その頃に私が大変お世話になっていた医者10年目になるＡ先生の言葉が今でもしばしば思い出されます。彼はいつも自分の患者さんから病状やこれから受ける検査のことで「先生、大丈夫でしょうか？」と不安げに問いかけられると口癖のように「心配は要りません。私もだてに10年医者やってませんから。」と答えていました。この「だてに10年医者やってませんから。」という自信あふれるフレーズに当時研修医だった私は何度しびれたことかわかりません。自分も10年後にはきっとこのしびれるセリフを口にする日が来るものと信じ、その日のために日々精進していたように思います（今から思えばあまりにも若いとしか言いようがありませんが…）。

あれから10年、私も気がつけば当時のＡ先生と同じ10年目の内科医となり、学生や研修医を指導しなければならない立場となりました。さて例のセリフについてですが…実のところいまだ一回も使ったことはありません。というのも急速に進歩する医療技術や昨今の想像もできない医療事故に関する報道を見るにつけ、また自分自身も臨床上のいくつかの苦い経験を積むにつけ、私にはとても「だてに10年…」と言い放つことができず、むしろ「たかだか10年しか…」と思うようになってきました。実際に自分が10年たって振り返ってみた感じでは、この10年の間にどれほどの進歩が自分自身の中にあったのか充分な自信が持てないまま今日に至っているような気がしてなりません。結局、今の所あれほどあこがれた自信あふれる名セリフは永久に使わずじまいとなりそうな気がしています。「どこまで行っても臨床は奥が深い…」、あえて言えばこれだけが10年目の私が臨床から得た答えと言っても良いかもしれません。

そんな私がこれからの21世紀に次の10年をどう進んで行くべきか？この事を考える時、私の恩師である前第一内科教授（現副学長）の高原二郎先生が我々若い医者に常々「遠い目と近い目」を持つようにとおっしゃられていたのを思い出します。近い目とはここ１年ぐらいの間に自分が何を達成していなければならないかという目標を明確に持つことであり、遠い目とは10年あるいはそれ以上先にも明確な目標を持つことであると私なりには解釈しています。今回「10年後の私…」というテーマを頂き、先の10年を振り返った時、この10年間もの間に自分の中に近い目も遠い目も持っていなかったことが現在私の中にある達成感の欠如や自信の欠如につながっているような気がしてなりません。10年後の私はいわゆる不惑の年を迎えているはずであり、是非ここまでには近い目の積み重ねと揺るぎない遠い目の確立を目指したいと思う今日この頃です。

〜10年後も「のほほん」(^^ゞ〜

藤田　陽子（平成７年卒）

原稿依頼をいただいて、あ〜もう10年経ってしまったのかと…［元気に生きてます（笑）］

10年前の拙文を再読して、赤面しきりですが、思えば、学生時代と合わせ、高松には約20年間住んでいたことになります。九州に帰ってきたものの、九州弁より讃岐弁が出てしまう毎日です。

この10年、日本も日本をとりまく情勢も大きく変わりました。12年前、公衆衛生学の教室に入局させていただき、環境問題に関わっていく予定でしたが…

またまた紆余曲折の人生を味わうこととなりました。

大学の医局から保健所へ、そしてまた一般病院へ戻るという回り道をしながら、福岡の健診センターに流れ着きました。保健所で経験した結核対策やワクチン相談などは、現在の仕事にも重なって、めぐる縁（えにし）を感じています。

一人の患者さんと長くお付き合いする機会の多い病院と異なり、働く世代の方々の健診、人間ドックが中心となり、様々な職業の方々との一期一会の日々です。一見、健康そうにみえる人々から、仕事や人間関係のストレス、抱えている病気とも付き合わなければならない不安や悩みを垣間見させられることもしばしばです。

そういうこの私もア・ラ・カ・ン（around kanreki）に近づきつつあります。最近、腰痛で受診して、『脊柱管狭窄症』という立派な病名をいただき、まだ気持ちは若いつもりでいただけに、心の中ではムンクの『叫び』状態になりました。

あちこちの体のきしみと付き合いながら、こうして人は、年をとっていく自分の体と折り合いをつけていくのかと、しみじみ思うようになりました。変わらないのは、のほほ〜んとした緊張感のなさだけでしょうか…。

いろんな方々の体調や仕事や心の悩みに耳を傾けながら、私にできることは、ひたすら聞いて、笑顔を届ける事くらい…

そういえば、仏教の世界には和顔施という布施があるそうです。お金や供物をささげることはできなくても、ただ優しくほほえみかけるという布施。

和顔施地蔵を思い浮かべながら、企業戦士達にのほほんとした心の余裕を少しでも伝えることができたらと（ストレスや病に負けないで…）、これからの10年に思いを馳せています。

地震や津波や竜巻にも負けず（遭わず？）、PM2.5にも負けず、元気で長生きして、いつかまた、四国八十八か所をお遍路できますように、と願いながら…

へんろ道　悩める姿に　ほとけを見

（お粗末m(＿＿)m）　　のほほんねこ

香川医科大学医師会会報　第13号誌（平成13年11月発行）より転載

じゅっじゅうねんご？！

衛生・公衆衛生学　藤田　陽子

「十年後　できることなら　このままで　今と変わらぬ　のほほんねこで」

健康に絶対の自信を持っていた人間が、思いがけず人並みに（？）病人生活を経験してしまうと、そろそろ自分の老後が視野に入り始めた世代としては、10年後となると、「生きてるかなあ？」などと、まず考えるようになってしまった（笑）。加えて、あのアメリカでの同時多発テロ事件！人類は21世紀をまっとうできるのかしらと不安になってしまう。今より10年分歳をとった自分の姿はまだ想像できるけれど、身近ではこの大学が、周囲の社会情勢や制度が、そして世界やこの地球環境がどうなっているかはあまりに流動的で想像できない。

「笑ってよ　わたしのために　笑ってよ　あなたのために　忘れ得ぬひとへ」

患者さんの笑顔を取り戻すことを楽しみに診療生活をおくっていたのが（今おもえば、患者さんの笑顔に私の方が元気づけられていたのだけれど）、思いがけないことに、母校である香川医大に戻り環境問題に関わることになった。なんとかの手習いで、まずは新聞を読むことから始めている。私は、方向音痴、運動音痴、そして音痴と三拍子そろったうえに不器用な人間で、趣味といえるほどのものはないけれど、子供の頃からなぜか高いところが好きで、高い山を見ると誘われるように登るようになってしまった。うれしいことに、この秋、とてもひさしぶりに登山の機会を得、中央アルプスの宝剣岳、中岳、木曽駒ヶ岳に登ることができた。木曽の原生林の美しさに胸を打たれながら、天からの水をその根に蓄えて大地を守り、二酸化炭素をとりこんで大気を浄化し、多くの生きものを育んできた森のめぐみに思いをはせ、自家用車の乗り入れ規制は行われているものの、地球規模で進む環境汚染にけっして無傷とはいえない森のすがたに、この自然を守ることがこれからの私たちの使命なのだと改めて感じさせられて帰ってきた。最大の環境破壊は戦争だけれども、便利さを求めるひとの営みや少しずつ蓄積される人工物による破壊や汚染が今は大きな脅威となってしまった。

……10年後のわたし、それは世界をまたにかける登山家に、というのは冗談ですが、今と変わらぬ、できるなら今以上に深い緑の山に出会える平和な社会で、のほほんと暮らせてますように。そして、そうなるようにこれからの10年、少しでもなにかできたらと思っているのですが……

「ほろびゆく　さだめと受けて　黙するか　いのち（森）の輝き　うつくしすぎて」

おそまつ！（のほほんねこ）

『10年前の私』そして『10年後の私』へ…今、オレは頑張ってるぜ。

天理よろづ相談所病院泌尿器科　植月　祐次（平成12年卒）

前回寄稿後12年間の私の職歴は香川大学医学部附属病院（大学院入学）－キナシ大林病院－坂出市立病院（大学院卒業）－倉敷中央病院－香川大学医学部附属病院－愛媛労災病院－天理よろづ相談所病院（現在）となっています。

学生時代落ちこぼれ組の私ですが、医者になってからは自分なりに頑張ってきたなぁとつくづく思います。それとともに「人生は運と縁」をモットーにしている私らしくたくさんの周囲の人々に恵まれた12年であったと思います。そこで今回は私のこの12年間を語る上で欠かすことのできない二人の尊敬すべき先輩のお話をさせていただきたいと思います。

一人目はもちろんわが教室の“リーダー”筧善行教授です。筧先生は私が医者になって２年目、ちょうど前回寄稿直前に着任されました。私は前教授の竹中教授の退官１年前という普通の人は入局しない時期に周囲の反対を押し切って(笑)、泌尿器科に入局しました。「とりあえず香川に入局して、次の教授を見てから進路を決めよう。次の教授によってはどこか他に移ろう。」という位の軽い気持ちで一生の進路を決めました。しかしやはり私は「持っている」男です。次の教授に筧先生が就任されたことは本当にラッキーでした。筧先生は我々医局員にわかりやすく方向性を示してくれました。「世界中どこに出しても恥ずかしくない研究、治療（手術）をしなさい。」当時はまだ標準治療すら怪しかった私でしたが、常識、世間を知らな過ぎたので逆にこの言葉は刺さりました。12年たった今この言葉をどこまで実践出来ているかはともかく、常に明確な到達地点を持って仕事をすることは出来たと思います。また、私生活でもとても面倒見のいい教授で仕事、遊び常に全力で我々と向き合ってくれます。うちの医局員は皆教授夫妻に仲人をしていただいていますが、まだ誰も離婚をしたり家庭内不和に陥っているという話を聞かないのもひとえに教授の人徳のなせる業と思います。

二人目はわが教室の“サブリーダー”杉元幹史准教授です。杉元先生には私が医者５年目に赴任させていただいた坂出市立病院で教えていただきました。当時の坂出市立病院泌尿器科はまさに「香川大学泌尿器科の虎の穴」的存在でした。杉元先生は外来、手術、マネージメント全てパーフェクトで教科書に載っていない色々なことを勉強させていただきました。手術方法はもちろんのことインフォームドコンセント、（ややこしい）患者との付き合い方、プレゼンテーション方法…数え上げたらきりがないくらいです。特にトラブル対処法は絶品で、手術トラブル、患者トラブル…（もちろんトラブルは非常に少ないですが)、トラブル時の対応、大事になる前の消火の仕方等とても勉強になりました。トラブル時の杉元先生の対応がみたいので、ある意味トラブルが楽しみになりました。その後も大学病院でも色々教えて（勝手に盗ませて）頂いたことは今でも自分の技術的、精神的な原点であり到達点であると思っています。

中央が著者

そう言った尊敬すべき先輩に恵まれて、現在私は他大学の関連病院である天理よろづ相談所病院で働いています。また以前にも関連でない倉敷中央病院で

働かせていただきました。ほとんど誰も知らない、もちろん自分を知っている人もいない甘えの許されない状況で、いつも考えていたのは、「香川大学泌尿器科の代表で来ている。」ということと「他大学出身者に負けてたまるか。」ということでした。私がいい加減なことをすれば「香川大学の植月が…」、「筧教授のとこの植月が…」と言われます。だからその時々で自分の現在の力量を過大評価せずに常に全力（の８－９割くらい（笑））で働くように心がけました。幸いどこにいっても周りの人々によくして頂き、とてもいい経験を積むことが出来ました。他大学の先生方、看護師等とも今でも続いているいい人間関係を築くこともできました。

現在医者になって13年目、自分で言うのもなんですが理論的にも技術的にも「まずまず恥ずかしくないレベル」には到達していると思います。これもひとえに指導して頂いた先輩方、常に突き上げてくる後輩達、各病院の看護師さん他、この12年間に出会った全ての人々のおかげと思ってます。この場をお借りしてお礼申し上げます。

最後に『10年前の私』へ、「素晴らしき先輩、後輩に恵まれて予定通りオレは（それなりに）頑張ってるぜ。」そして『10年後の私』に胸を張って同じことが言えるように、また10年頑張っていこうと思います。

香川医科大学医師会会報　第13号誌（平成13年11月発行）より転載

10年後

香川医大　泌尿器科　植月祐次

10年後って、何年？ 2011年か。俺何歳やろ？ 39 ！やばっ40前やん。結婚できてんのかなあ。うちの科の○○先生とか××先生とか△△先生とかみたいに幸せな結婚をって、うちの先輩みんな独身やん。俺もその路線いくんか！。（ちなみにうちの科は独身の先生が多く泌尿器科独身者の会まで存在する。）

いきなり話し口調で失礼しましたm（＿＿）m

「10年後のわたしは…。」で依頼されて率直に思ったことを言葉にしてみた。思えば国家試験に何とか合格し、名前だけは医者になって１年半が過ぎた。この１年半で何が変わったかと聞かれたら何だろう？「将来医者になったらあんなことやこんなことをしてやる。」（かなり妄想が入っておりここでは書けません。）と考えていたが、世の中そんなに甘くないなあと痛感している。医者としてもまだまだ修行中の身であり自分を振り返る余裕はないが、泌尿器科医として自分の将来について何となくではあるが思うところがあるのでそれについて書いてみようと思う。

泌尿器科に興味を持ったのは６年になってからだった。たまたま知り合いの先生がいたので特に興味はなかったがスーパーポリクリに行き、そこで良くしてもらったのが縁で入局を決めた。これからの高齢化社会に伴う泌尿器対象患者の増加、将来的な欧米並みの前立腺がん患者の増加などももちろん考えてではあるが本当に何となくだった。気持ち的には「医者が何ぼ増えても泌尿器やったら10年後も仕事はあるやろ。まああわんかったらやめたらいいし。」と思っていた。ところが入局してみたら治療の幅が広くとても面白い。それと同時に覚えるべきこと、こなすべき手技、手術も非常に多い。10年後に、一人前の泌尿器科医だと言えるようになるのは大変な努力が必要だと思う。

そんなことを考えていたら時々不安になることもある。果たして10年後にこのオペはできるようになっているのか。患者やスタッフにえらそうになっていないか。自分を見失っていないか。家庭は崩壊していないか。いろいろ考えていたら夜も眠れないこともある（これはうそです。よく眠れます）。しかし私にとってラッキーだったのは、新しい教授に筧教授が就任されたことにより、症例も増え、研究の枠も広がり、研修できる病院の質も数も大きく増えたことだ。あくまでも自分次第ではあるが、取り巻く環境が徐々にではあるが整っていくのを感じていると共におぼろげな目標が形になりつつある。

最後に「10年後、私は…」に対する答えであるが、泌尿器科医をやっているのは間違いないと思う。大学は辞めてないだろうが香川に帰ってきてるか、修行に出てるか、はたまたどこかに留学でもしてるか、それはわからない。しかし、10年これだけがんばってきたと胸をはって言えるようになっていたらいいと思う。この物騒な世の中命があればの話であるが…（例の事件のあとなのでどうもそんなことを考えてしまう。）

懇親会

香川大学医学部（旧香川医科大学）ウィンドサーフィン部創部30周年記念の会開催報告

平成25年７月27日、リーガホテルゼスト高松において、香川大学医学部（旧香川医科大学）ウィンドサーフィン部創部30周年記念の会が開催されました。毎年７月の最終土曜はウィンドOB会の日と決まっており、私は卒業後ほとんど参加してきましたが、今年は特別なOB会というわけです。いつもはＴシャツとスニーカーという感じで参加するOB会も、今回ばかりは、暑い中黒スーツに身を固め、土曜午前の診療後、羽田から高松に向かいました。

高松空港に着くと、同じ便にウィンドの後輩の村上君が乗っていました。彼は、私が卒業した年に入学したので、私とは全くかぶっていませんが、まるで一緒に学生時代を過ごしたように声をかけられるのもOB会のなせるわざでしょう。東京での心カテの勉強会の帰りで、彼も30周年に参加するという事なので、彼の奥さまの運転する車に同乗させてもらい、会場に向かいました。車の中には可愛らしい二人の男の子と一人の女の子が乗っており、「この子が長男と長女なの？」と村上君に聞くと、「いえ、二男二女です。」との答え。じぇじぇじぇー！この上にもう二人子供がおるんか？つまり見た目全く現役の頃と変わらず若々しい彼は、既に５人の父親なのです。車中、心カテの最新の知見について詳しく語ってくれた彼の涼しげな横顔は、瀬戸内海に煌めく太陽のように眩しく輝いていました。

会場に着くと既に会は始まっており、壇上では初代顧問の藤田守先生がお話されていました。カリスマ初代キャプテン今西さんの後を一年生の時に引き継ぎ、右も左もわからない私を、藤田先生はよく部屋に呼んで下さり、部の運営の事や勉強の仕方など、親身に教えて下さいました。藤田先生のよくおっしゃっていた、「山手線のどこでおりてどの地下鉄に乗り換えてどこに向かうのか、その駅の名前と経路を覚えて行くのが勉強のやり方だ。」という言葉、学生の頃はチンプンカンプンだったのですが、医者になって幾年月、最近になってやっと、身にしみてその意味が理解できるような気がしております。藤田先生の後長きにわたり顧問をして頂いた元薬理学教授の安部陽一先生もいらしており、精力みなぎる笑顔でお話されておりました。まだまだ現役バリバリで、種々のビッグプロジェクトを指導されているとの事で、安部先生から薬理学教室を引き継いだ現役教授西山君もうかうかしていられないかも？とか感じてしまいました。来賓で来られていた元ヨット部顧問で、元医動物学准教授の村主節雄先生も全くお変わりなく、そういえば私が学生時代、まだ瀬戸大橋が無い頃から、毎日船で岡山から瀬戸内海を渡って通勤されていると伺って、びっくりした事を思い出しました（ワイルドだろぅー！）。

ウィンドサーフィン部は初期の頃、KBSC（香川ボードセーリングクラブ）という高松の社会人のウィンドサーフィンの団体に公私に渡りお世話になり成長してきました。今回は懐かしいそのKBSCの方々も来られておりました。KBSC創設者である高松ウィンドサーフィン界のレジェンド、山崎久さんには、二次会で人生の深い話をお聞きして、しみじみ感動しました。怒号飛び交うウィンドサーフィンのレースの中で、いつも物静かに、何もなかったように優勝してしまうKBSCのエースだった森さんは、息子さんが大学のヨット部に入り、ご活躍中との事。実力もないまま１年から４年までキャプテンを続け、ブレまくっていた私にいつも声をかけてくださったKBSC二代目キャプテン藤本さんは相変わらず優しい眼差しをたたえてお

り、いつもオシャレなKBSC三代目キャプテン大久保さんは、八栗を舞台に映画を作られているとの事でした。

そして、久さんに言わせると、あの頃はクラかった、我がウィンドサーフィン部創設者の今西さんは、相変わらずスーツも決まる伊達男で、壇上にてウィンドサーフィン部始まりの瞬間の逸話を話してくれました。まさに高松の片隅の飲み屋さんで、クダを巻いていた？今西さんとKBSCのレジェンド達の出会いから我がウィンドサーフィン部は始まったわけです。私が大学に入学した入学式の後の、新入生勧誘会のウィンドサーフィン部の席に座り、妖艶な微笑みで私をウィンドサーフィン部に導いてくれたまゆみさんと、その前でオチャラケて私の緊張を和らげてくれた、当時は（てゆうか今も）所ジョージにしか見えない現顧問の合田さんの御夫妻は、30年経た今も変わらない仲睦まじさでした。やはり私が一年の頃、「夜の帝王」とか「和製マイケルジャクソン」とか呼ばれ、後に私を夜のバイトの世界（今は無きパブ、ダーティーディック、ウィンドサーフィン部の飲み会の二次会はいつもここでした）へ導いてくれた初代OB会長影山さんは、三次会のとり松（私達の時代は常に医大生のたまり場でした）のカウンターで、OB会運営の難しさを語ってくれました。ダーティーディックと言えば、今回の会に一次会から参加して頂いた、元ダーティーディックのママの希子さんは、上下白系の服で決めていたのですが、その背中の襟元の所に小さくmemory of summerと刺繍がしてありました。さりげなく今回の会への気持ちを表す希子さん、粋（イカ）してます！さすがは夜の古馬場のレジェンドです！（酔っぱらっていて、当日御本人に伝えるのを忘れてしまいました。西山くん、もし会ったら伝えておいてね）。かくして、とり松の大将の昔と変わらない「ありがとうございます！」の大きな声と最敬礼によって三次会まで続いた会はお開きとなりました。思い起こせば25-6年前、第一回のウィンドサーフィン部OB会はとり松の昔の店舗の二階の小さな座敷で始まりました。そのOB会では、とり松の大将がカラオケで裕次郎とか歌ってくれました。それが今や100人にも近い人数でのOB会となったわけです。

翌朝、ホテルの部屋で「津田には寄りたいが足が無いしなあ」と、二日酔いで痛む頭でボーッと考えていたら、山田君から電話があり、藤田先生と三人で津田までドライブー♪という話になりました。山田は昔も今も、ふだんはおしゃべりキングコングといった風情ですが、誰かが何か困っていると必ずやってきて、何から何まで準備してくれて助けてくれる、正義のヒーローみたいな奴です。高松から津田に向かう11号から

久しぶりに見渡す、田んぼの緑や、空の青や、屋島や八栗の神話チックな山並みは今も変わっておらず、あの頃日常だった景色がこんなにも美しかったのかと、目にしみました。それにしても藤田先生は、道の途中のいろんなお店や景色の事を、私達よりもはるかに鮮明に覚えていらして、びっくりしました。先生にとっても香川での生活は素敵な想い出なのでしょう。さて、津田には、浜の前の我が家を艇庫やビーチハウスとして後輩達に提供してくれている山内君がやはり居ました。彼がいなければ、ウィンドサーフィン部は今まで存続しなかったと思われるくらい、若い世代のOB、OGや現役部員達の一番そばに居続けてくれているOBです。山内君と二人で浜に立って海を眺めると、津田の入江の右側の浜が埋め立てられていて、わけのわからない施設になっていました。彼によると、その影響で、以前は津田で釣れていたカレイなどの魚が釣れなくなり、潮流が変わって、浜の形が変形してきているそうです。香川は変わっていないという私の印象は、たまにしか高松に帰らない、今や旅行者に近い私の、単なる願望にすぎないのかもしれません。

毎年OB会の翌日は津田の松琴閣前でOB戦をやります。松琴閣前に行くと、現役やまだ若いOB、OGの子達が「ちわーっす！」とかあいさつしてくれました。なんとすでに20人くらい集まって海を見ています。しかもどう見ても女の子の方が多い！いやあ、隔世の感がありました。みんな、思い切りウィンドサーフィンを満喫してねー♡♡♡　安全第一でねー♡♡♡　そして、できれば、君たちだけは昔と変わらず、「来るものは拒まず、去る者追いまくり（by山田勇）」を合言葉に、津田の海に何かを捨てに来る人や、何かを見つけに来る人全てを包み込むような、情の深いウィンドサーフィン部を目指してほしいと、せつに願います。

すみません、まだまだ紹介したいOB、OGがたくさん居るのですが、スペースがなくなってしまいました。しかし、こうして今回、30年も昔の世界にタイムスリップができるのも、ウィンドサーフィン部を今まで一生懸命守ってくれて、今も守ってくれている部員のみんな、そしてOB会を運営してきてくれたOB、OG、関係者のみんなの一人一人の絶え間ない努力のおかげと、本当に感謝しております。OB会というのは、科学の力では作る事のできない「タイムマシン」を、人の努力で作り上げてしまう奇跡的なシステムだと思います。そして、それは、OB会よりもっと大きい枠の「讃樹會」という同窓会も同じだと思います。讃樹會の運営に携わってくれている全ての皆様、いつも本当にありがとうございます。この場を借りてお礼を言わせて頂きます。

追伸、新OB会長の苧坂君、来年もよろしくね！苧坂らしいOB会にしていってください！

平成25年８月

赤沼　真夫（平成３年卒）

追　悼

五味　淳先生（平成11年卒）を偲んで

五味先生の突然の訃報に私達一同は、本当に驚き深い悲しみでいっぱいです。

まだ43歳という若さでご逝去された五味先生、志半ばで病魔に倒れられたことは真に無念であり、もはや五味先生の勇姿を見ることができないと思うと、痛恨の極みであり哀悼にたえません。

私が五味先生とお会いしたのは、ラグビー部のOB会長として西医体の大会応援に参加した時でした。実にスポーツマンらしい爽やかな人柄でありながら、マイペースな行動で、周囲の人たちにある種の驚きと笑いを与えていたのがとても印象的でした。先生の気さくで飾らない人柄は接する全ての人たちに、親しみと信頼感を与えました。

医師として社会に出られてからも、患者様や地域社会に尽くされた功績は非常に大きいと存じています。五味先生の人徳や数々のご功績は、必ずや医師として働く同友後輩の方々にとって、大きな指標になると信じています。

ありし日の五味先生を偲んで、心から哀惜申し上げ謹んで御冥福をお祈り致します。

香川大学医学部｛3期生｝ラグビー部OB会名誉会長　津川　猛士（昭和63年卒）

今年もそろそろOB会の案内を発送しようと考えていた最中、五味淳先生の訃報を聞き、大変驚きました。同窓会からの連絡では平成25年６月５日御逝去されたとのこと。

享年44歳でした。ご家族様のご心痛をお察し申し上げ、心よりお悔やみ申し上げます。

悪性リンパ腫のため、２年前から治療されておられたとのことですが、その間もOB会の案内にはご丁寧な返信をいただいておりました。

機会があればOB会に参加され、後輩の指導や仲間との旧交を温めていただきたかったのですが、叶えることができず大変残念に思います。

OB会員、現役部員一同、生前のご厚情に感謝の念を忘れず、今はご冥福を心よりお祈りいたします。
いつまでも天国から見守っていてください。　合掌

ラグビー部OB会長　外山　芳弘（昭和63年卒）

謹んで、五味淳先生のご霊前に、心からご冥福を祈り、追悼の意を込めて一文を捧げます。五味淳先生が平成二十五年六月五日御逝去されました。このご連絡を受けたのは讃樹會から連絡を受けたラグビー部ＯＢのメールでのご連絡でした。悪性リンパ腫のため、二年前から治療されておられたとのことです。

あまりにも早すぎる五味君の人生に運命の理不尽さと不条理さをおもわずにはいられません。卒業後、ＯＢ会などでいつでも会えるつもりでいましたが年賀状などのやりとりくらいでお会い出来なかったのが残念です。

五味淳君と初めてお会いしたのは、新入生の部活動の勧誘の際であったと思います。半ば強引にクラブに勧誘したにもかかわらず、にこにこして我々の仲間に加わってくれました。ラガーマンとは思えないような温和で心優しい性格の彼は、グラウンドに出ると一変し、ひたむきなプレーが持ち味でいいタックルをしていました。プレーの激しさが災いとなったか、足の骨折をされ、グラウンドの外で熱い応援をされていた時期もありました。あの頃、我々は実に非生産的な、しかしながら大変密度の濃い熱い時間を過ごしていましたね。私は今、あの時の熱さのお釣りで生きているような気がします。そして、君の死に際して、自分が生かされている意味をもう一度噛み締めています。

天国の五味君に失望されないよう、後悔のない人生を送ることが、残された我々の五味君に対する供養であると思います。

どうぞ天国から御家族、友人そして私たちを見守って下さい。ありがとう、そして、さようなら。

宮崎　達也（平成７年卒）

1992・香川医科大学ラグビー部　前列右端が五味淳先生

※集合写真は、横山元浩先生のご協力でお借りしました。

五味淳先生、先生が１年生だったころ練習が終わった後も歯をくいしばってタックルバックにタックルしていた姿、一生懸命ラグビーボールを磨いてくれていた姿を、今でも昨日のように憶えています。先生が卒業してからはお会いできていませんでしたが、この度の訃報は本当に信じられない思いです。現役の部員たちも日々、精進しております。天国で香川医大ラグビー部をいつもの笑顔で見守ってあげてください。

心からご冥福をお祈り申し上げます。

横山　元浩（平成５年卒）

五味さんのご逝去を聞いて１ヶ月近くたちますが未だに信じられません。

風が吹かない蒸し暑い医大の土のグランドで、色白な体に白と水色のジャージを着て、ニコニコしながら楽しそうにラグビーをしている五味さんの姿が昨日のことのように思い出されます。

僕と五味さんが出会ったのは20年以上前になります。五味さんは高校の時からのラグビー経験者でした。僕がラグビー部に入部した時の２学年上の先輩で、ラグビー初心者で１人暮らしにもまだ慣れていない僕をいつも気にかけてくれました。五味さんの口癖である「いいんだよ、いいんだよ。大丈夫、大丈夫。」に何度も助けられました。

五味さんのプレーで強く印象に残っているのは、頭からつっこんでいく激しいタックルです。試合中もにこにこしながらプレーをしていて、本当にラグビーが好きなんだなあと感じたものでした。

卒業後は地元の横浜に戻られ病理学を専攻されていました。僕は２年遅れて関東に戻り小児科医になりましたが、卒後５年目で神奈川県立こども医療センターに配属された時、偶然にも五味さんが同じ病院の病理部門に勤務していることがわかりました。病理部へ行くと、汚れた白衣で必死に顕微鏡を覗いている五味さんがいました。声をかけた時は五味さんも驚かれていましたが、お互い再会を本当にうれしく思い、あっという間に学生時代に戻ったように語り合いました。僕自身、色々悩みを抱えていた時期で話を聞いてもらったのですが、その時も五味さんの口癖である「大丈夫、大丈夫」に救われてずいぶん楽になったような気がします。今でも本当に感謝しています。

その後お互いの職場が変わり年賀状のやりとりだけになっていました。毎年、一言何か添え書きがしてあるのですが、今年の年賀状には「昨年はままならぬ１年でした」とありました。仕事が大変なのかなと勝手に考えていたのですが、まさか体調をくずされているとは思ってもみませんでした。もう一度お会いしてお話をしたかったです。

あのグランドで一緒に汗を流した仲間達の心の中で、五味さんはずっと生き続けています。そして僕たちは五味さんの人懐っこい笑顔を思い出すことでしょう。

五味さん、どうかやすらかにお眠り下さい。

川越　信（平成12年卒）

平成３年卒業生（６期生）同窓会のご報告

平成25年１月12日「天勝」（高松市）で、平成３年卒業生有志10名による同窓会を行いました。この同窓会は、平成23年９月13日に大腸がんで他界された、長谷川真也君の追悼が主な目的でした。彼の学生時代の思い出を語り合い、残されたご家族へどのようなかたちでご協力できるかなどを、みんなで真剣に話し合った、非常に有意義なひとときでした。長谷川君のご冥福を祈るとともに、これからの自分達の生き方にも思いを巡らせるひとときでもありました。

故・長谷川真也君の遺稿、「病気と共に」の一部抜粋

（千葉大学耳鼻咽喉科「蝸牛会」誌、平成22年11月発行に掲載）

（前略）…まず、病気が発覚して最初に思ったこと。病気になって悔しい、残念というより、なぜもっと早く発見しなかったのか？…という事でした。病気になるのは仕方ない。でも、もっと早く対処できていれば…。そのためには定期健診（人間ドック）は忙しいからと言わずに早期受診ですね。皆様も参考に。そして何よりも家族のこと。（中略）

自分のために将来苦労はさせるにしても、子供の未来の可能性、才能を奪ってしまうことは決してあってはいけないこと。（中略）

自分はこの家族に何を残すことができるのか？どうすればいいのか？答えは分かりませんが、今でもそればかりを考え、自分の行動基準となっています。

そして、人間として。生物として。病気の前に結婚でき、子供を授かったことは、本当に幸いでした。「自分は何のために生まれてきたのか」と、考えることがあります。仕事の業績？医師としてどれだけ人の助けとなったのか？それよりも、子孫を、自分の・祖先の遺伝子を次の世代に残せたこと。これが、自分の生きてきた証しと思えます。子供の姿を見ると、「自分はまだここに生きている。」と実感しますし、生物として最低限のそして最高のことはしたな、と思えます。これも自分もかつて所属した（？）独身会の、独身を謳歌している方々への進言です。「子供だけは作りなさい。」（子供が授からなくて、御苦労している方には大変申し訳ない話で、失礼な話ですみません。）……

田中邦彦（平成３年卒同窓生）より、長谷川くんの遺稿を読んで。

（前回の）同窓会来てないなとは思ってたけどそれぞれ忙しい身だし遠いからかと思ってたのに。

短期記憶はどんどん失われていくのに、昔のことはよく覚えてるもので、医大ハイツの長谷川の机が小学生用だったこととか、長谷川おすすめのビデオがすんごいつまらなくてイライラしたこととか、エンストするたんびにカセットが飛び出てくる長谷川の車とか、夏場にハンドルでやけどして手のひらに絆創膏貼ってたこととか、公衆衛生の課題がすすまなくてふたりでモンモンとしたこととか、サウナ行ったこととか、年末明石に泊まりに来たこととか、学祭のビラ配りに行ったのに一枚も配れなくて無言で帰ってきたこととか、成田山に泊まりに行ったら親父さんが妙に新しいモノ好きだったこととか、卒業旅行で中国行って早朝の駅で震えてたこととか、結局あの時が最後だったのかな。原稿も相変わらずへたくそな文章で苦笑いだが子供はつくりなさい、自分の遺伝子を残したいと断言できるところみると苦しい闘病生活であったはずなのに充実した日々でもあったのか。

自分がへろへろのところへ訃報でもうあかんわという気がしたけど、手記を読むとこんな遺伝子で申し訳ない思いでいっぱいながらも、子供の顔見れるのは幸せかと、なんかネガティブ掛け合わせてプラスになってしまったような気がします。

内山順造（平成３年卒同窓生）より田中邦彦のコメントを受けて

医大ハイツの日々が、それこそ、一晩、走馬灯のようにめぐっていたのが、解り、私も、田中、丸山、小坂の部屋を飲み歩き、小林君にしかられ、長谷川に「うっちやまさ～ん。」と苦笑いされた日々を思い出し、今度はこっちが、今一階にビールの追加を取りに行く破目になり、これから、眠れそうにない。俺の親父が大学時代に亡くなり、一緒に飲みたい時にいないものだから、あいつはどんな奴だったのだろうと気にかかる。DNAのルーツを知りたくなる。親父の同窓会に紛れ込み、親父の友人に、俺の知らない青春時代の話を聞いて、何故か懐かしい気持ちに満たされる自分がいて、長谷川の今、６才のご子息にもきっとそんな気持ちになる時がくると思うと、その時、語ってやりたい、「お前の親父、俺は大好きだった」と。となりには、田中もいて田中が何か語りだしたら、酔っ払った俺が、絡んで、小林君に怒られる。息子さんがそれを見て、懐かしそうに笑っている、そんな、時間を作りたい。

藤岡　徹（平成３年卒同窓生）より長谷川を偲んで

ご逝去の報に接し、ご家族の皆様のご心中お察し申し上げます。ご子息には、お父さんの大学時代のイメージが少しでもお伝えできれば幸いです。

長谷川（失礼ながら敬称略）は背が余り高くなく、お世辞にもスポーツマンタイプでもなく、しかし長谷川がいると何故かその場が和むような貴重な存在でした。また人と人とを繋げる接着因子の様でもあり、合コンでもそこそこ人気者で「上善は水のごとし」のような生き方を自然体で行える懐の深い人物でもありました。

香川医大では、彼も私もバレー部に所属しておりましたが、彼はどちらかと言うと縁の下の力持ち的な存在で部を盛り上げました。またそのよしみで、千葉で行われた彼の結婚式にも出席させていただきました。職場代表者のスピーチからも、以前のスタイルと相変わらず皆がいやがるようなことを進んでやり、皆をまとめているような印象を受けました。これが、彼と話せた最後の時になりました。

年賀状は、毎年やりとりしておりましたが、ある年、元気のない文章で闘病中との内容でした。まさか大病とは知らず、また当時、我が身も多忙にて連絡をとる余裕がありませんでしたが、今から思えば無理にでも連絡を取っておけばよかったと後悔しております。

人生は一冊の大きな問題集に例えられることがありますが、長谷川のはみんなより少し薄いけど、難問の詰まった内容の濃い問題集であったと思います。人は何故生きているのか、あるいは生かされているのかという、永遠に解けそうにない問題の答えは、我々の考えの及ばない世界に有るのかもしれません。人が亡くなって三途の川を渡り、そこで何を聞かれるのか？ある本には、人生の使命を果たすことができたか？充実した人生を送ることができたか？の二つを聞かれるとあります。また人が生まれてくるときは、偶然にある両親のもとに生まれてくるのではなく、予定された人生計画のもとに自ら両親を選び、生まれてくるともありました。以上のことを証明する術はありませんが、長谷川は短い人生の中で楽しいことや苦しいことも含めて充実感を味わい、医師として、また父親としての使命を充分に果たしたと思います。

長谷川が血便の症状が出たときに、早く検査を受けなかったことを悔やんでおり、彼が我々に残したメッセージの一つとして、健康管理には充分気をつけるようにとの指摘があります。忙しくても人間ドックなど検診を毎年受けなければなりません。ちなみに私も医局長業務で忙しい折に血便が３日続いたことがありました。ニフレックを２L飲んでCFを受けましたが異常なく、その１時間後には医局員を連れて他施設の病院長に挨拶に行くなど、業務の合間を縫うように検査したこともありました。（みなさんも検診は必ず受けましょう）

最後に、残された我々は長谷川の分まで人生を全うし、あの世に帰って長谷川に笑われないようにしたいものです。彼の安らかなるご冥福を心よりお祈り申し上げます。

Album／28期生　祝卒業　－平成25年３月24日－

Outstanding teacher of the year
受賞の大西　平先生

謝恩会実行委員長の
佐野君

讃樹會会長代理の舛形先生から謝恩会
実行委員長に卒業記念品の目録贈呈

編集後記

会員の皆様、今年も暑い夏そして残暑といかがお過ごしでしょうか。
さて、皆様方のおかげでお手元に会報第46号をお届けすることができました。心より御礼申し上げます。ご就任のご挨拶をご寄稿いただきました、同窓生で鳥取大学教授にご就任されました冨田修平先生、学内で教授にご就任されました和田健司先生、上野正樹先生、誠にありがとうございました。またご退官のご挨拶をいただきました小林良二先生、長い間お世話になり感謝申し上げます。
本号は、特集として「女性医師」をテーマに取り上げております。様々な分野で女性医師としてご活躍の５名の先生方からご寄稿いただきました。香川大学は男女共同参画を推進しており、女性医師としての現場の声をお訊かせいただけたことは、今後の男女共同参画の推進に参考になるものと思います。お忙しい中のご執筆、ありがとうございました。
さらに、東北大震災の被災地である気仙沼の病院の研修医受け入れ第１号として活躍されている岩本隆志先生から近況報告をいただきました。
また本号では、他に盛りだくさんの内容で構成することができました。ニュースとしてiPS細胞からエリスロポエチン産生を作り出すことに成功した人見浩史先生の話題は、若い先生方にリサーチマインドの重要性をご理解いただけるものと思います。留学レポート、学生さんの短期留学報告、お馴染みの「10年後の私の10年後」など充実した内容になったと思います。研究助成金および奨励金、国外留学助成金を受賞された先生方のご活躍を祈念したいと存じます。五味淳先生、長谷川真也先生、和田文雄先生には、心よりご冥福をお祈り申し上げます。追悼文のご寄稿いただきました先生方に感謝申し上げます。本号にご寄稿いただきました全ての先生方、学生さん、そして事務局の柚山稲子様に感謝申し上げます。
今後も会員の皆様方の近況などのご寄稿を賜りたいと思っております。何卒よろしくお願い申し上げます。最後に会員の皆様方のご活躍とご健康を心より祈念申し上げます。

平成25年８月　讃樹會広報局長　中村丈洋（平成７年卒）

事務局からのお知らせ

【連絡・問合せ先】
TEL　087－840－2291
E-mail dousou@med.kagawa-u.ac.jp

◆第12回関東支部会を開催します。
【日時】平成25年11月24日（日）13：00～
【場所】横浜ホテルニューグランド本館５階
スターライトルーム
横浜市中区山下町10番地
TEL／045－681－1841
【開催についての問合せ先】
世話役：伊藤　理
横浜市立みなと赤十字病院　TEL 045－628－6100
E-mail　osaito1005@yahoo.co.jp

◆平成23年度卒業生（26期生）の方で、卒業アルバムを申し込んで、まだお手元に届いていない方は同窓会事務局まで連絡下さい。

◆本年の香川大学医学部医学部祭の日程は次の通りです。
平成25年10月11日（金）～13日（日）
◆医師賠償責任保険を年間を通じて受け付けています。（途中加入ができます）
◆同窓会、懇親会を開催する際には、10人以上集まると一人3000円の支援がありますので是非ご利用下さい。
◆国外留学助成金の申込は年２回です。直近の締切は本年９月末日です。次は来年３月末日となります。
◆学術助成金の申込締切は毎年４月末日です。ふるってご応募下さい。

訃報

名誉会員
和田　文雄先生
2012年12月
正会員
五味　　淳先生　平成11年卒（14期生）
2013年６月

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

お詫びと訂正

同窓会報45号P16において、全面広告を協賛いただきました公益財団法人林精神医学研究所の理事長のお名前を誤表記にて掲載しました。
正しくは「林　英樹」様です。
林　英樹理事長様、林精神医学研究所様におかれましては、ご迷惑をおかけし大変申し訳ありませんでした。
謹んでお詫びと訂正を申し上げます。

診療科だより

香川大学医学部附属病院　整形外科

加地　良雄
（平成６年卒）

同窓会の先生方におかれましては平素より大変お世話になっております。

今回は私たち整形外科の紹介をさせて頂きます。現在整形外科では骨軟部腫瘍外科を専門とする山本哲司教授のもと有馬信男病院准教授（脊椎外科、リハビリテーション）、真柴賛講師（膝関節外科、骨粗鬆症）、加地良雄講師（上肢外科、マイクロサージャリー）、岩田憲学内講師（股関節外科、骨粗鬆症）、人羅俊明学内講師（骨軟部腫瘍外科）のほか助教３名、病院助教２名、医員８名の計19名で診療、研究、教育などの業務にあたっています。

主な専門医等取得状況は日整会専門医11名、日整会脊椎脊髄病医３名、日整会運動器リハビリテーション医３名、日整会リウマチ医２名、日整会スポーツ医１名、日本手外科学会専門医２名、日本リハ学会専門医１名、日本脊椎脊髄病学会指導医２名、日体協スポーツドクター５名などとなっています。

年間手術件数（平成23年度）は635件で、その内訳は骨軟部腫瘍151件、脊椎119件、股関節68件、膝関節174件、上肢・マイクロサージャリー114件、その他９件でした。手術件数が多いことに加え、救急救命センターと連携した緊急手術にも携わるため、医局員は多忙な日常を送っています。また、手術待機患者数も常に100名を越えており、手術枠の確保と、ベッドコントロールにも苦慮しているのが現状ですが、整形外科診療に対する熱き想いを胸に、より良き医療を提供できるよう励んでいます。

今回せっかくの機会を頂きましたので、各診療グループの特色を少しずつですが紹介させて頂きます。

骨軟部腫瘍外科領域では化学療法や腫瘍用人工関節などの進歩により、多くの四肢悪性骨軟部腫瘍症例で患肢温存手術が可能になってきています。当科では、これまでの豊富な経験をもとに治療成績の向上に取り組んでいます。また、研究面では骨軟部腫瘍の細胞内シグナル伝達因子の役割に関する研究、腫瘍細胞の防御機構であるオートファジーに関する研究を行っており、骨軟部腫瘍治療の進歩の一端を担うべく日々努力を続けています。

脊椎外科領域では脊椎の内固定材料（インストゥルメント）の進歩が目覚ましく、当科ではこれらを用いた手術の経験が豊富にあります。環軸椎亜脱臼、脊椎骨折、脊柱管狭窄症、側弯症など多岐にわたる疾患に対し、インストゥルメンテーションを駆使した手術を行っています。

股関節外科領域では人工関節の材質の進歩が目覚ましく、耐用年数が非常に長期化してきています。特に人工関節の部品間接触面に特殊なポリマーを使用し水分を保持させることで、部品の摩耗を最小限にする技術（Aquala技術）により、さらに耐用年数は長期することが期待されていいます。当科ではAquala技術を用いた人工関節も積極的に取り入れており、人工関節の長期成績の向上が見込まれています。

膝関節外科では人工膝関節単顆（片側）置換術に力を入れています。これは変形性関節症に対し、従来は膝関節全体を人工関節で置換していましたが、近年、膝の内側のみや外側のみなど障害された部位だけを人工関節で置換する手技が用いられるようになってきました。これにより従来の全置換術に比べ、侵襲が少なく済み、関節の動きもより温存できるメリットもあります。当科ではこの手術を積極的に行っており、低侵襲であることも相まって、これまでは困難と考えられていた超高齢者にも適応を拡大することができています。

上肢外科・マイクロサージャリーでは陳旧性腱断裂や末梢神経損傷（橈骨神経や正中神経など）などに対する機能再建術を得意分野としています。これは一旦失われた運動機能を残存する神経支配の筋腱を移行するなどして再獲得する手術ですが、患者さんの日常生活機能の劇的な改善につながり、上肢外科の醍醐味と考えています。また、骨軟部腫瘍切除後の組織欠損に対するマイクロサージャリーを用いた再建術も得意としています。基礎研究ではマイクロサージャリーを用いた同種骨移植の研究に力を注いでいます。

以上の領域以外にも、外傷や肩関節外科、スポーツ整形外科など整形外科の領域は非常に多岐にわたりますが、これらの領域に関しては関連病院にスペシャリストを配置し、大学病院と連携して香川県下の整形外科診療を支えています。

以上、簡単ではありますが、整形外科の紹介をさせて頂きました。今後も同窓会の先生方には大変お世話になることと存じますが、御指導、御鞭撻のほど宜しくお願い致します。